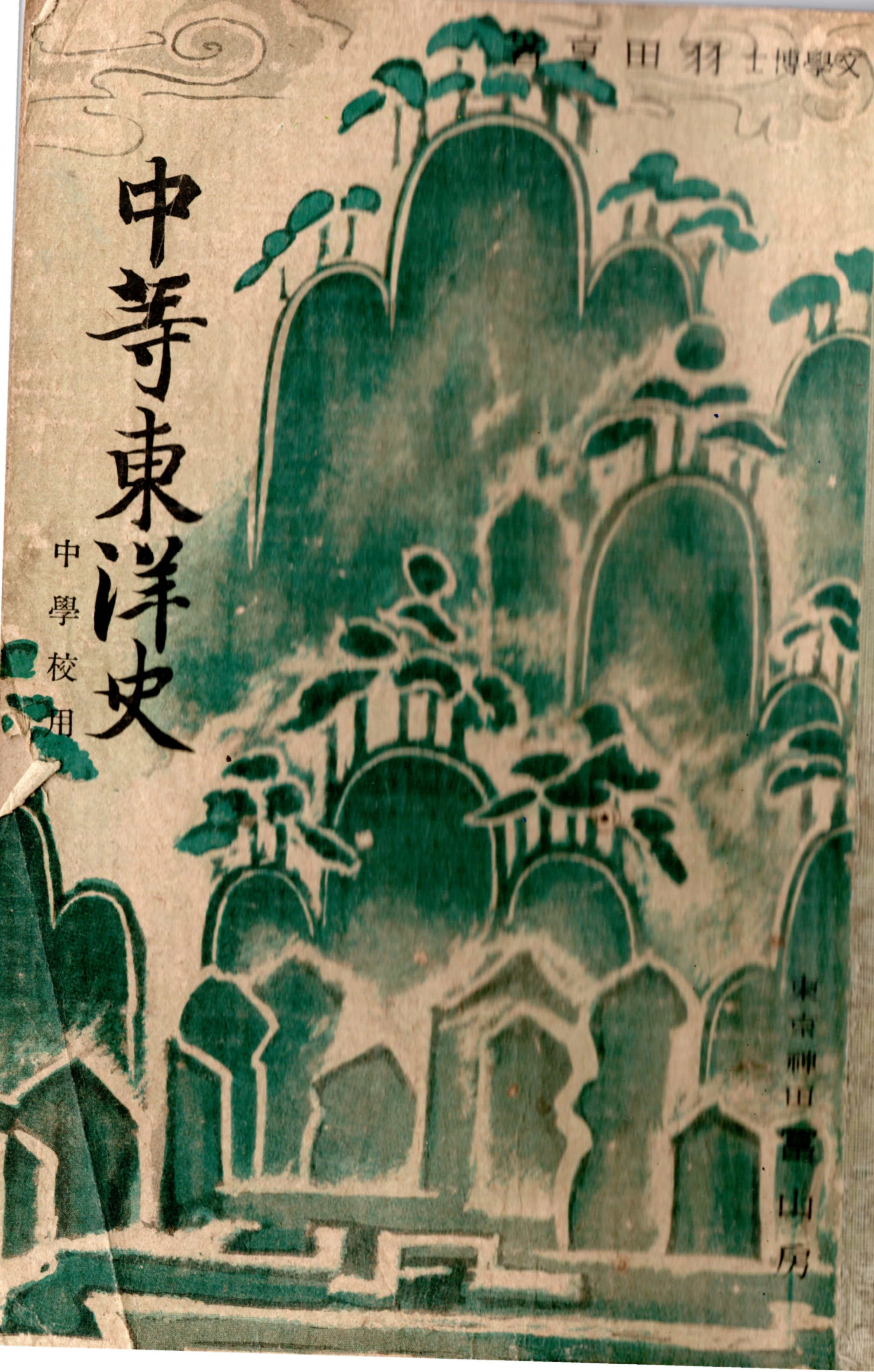

文學博士 羽田亨 著
中等東洋史
中學校用
東京神田 冨山房



文部省檢定濟
昭和十三年二月一日　中學校歷史科用

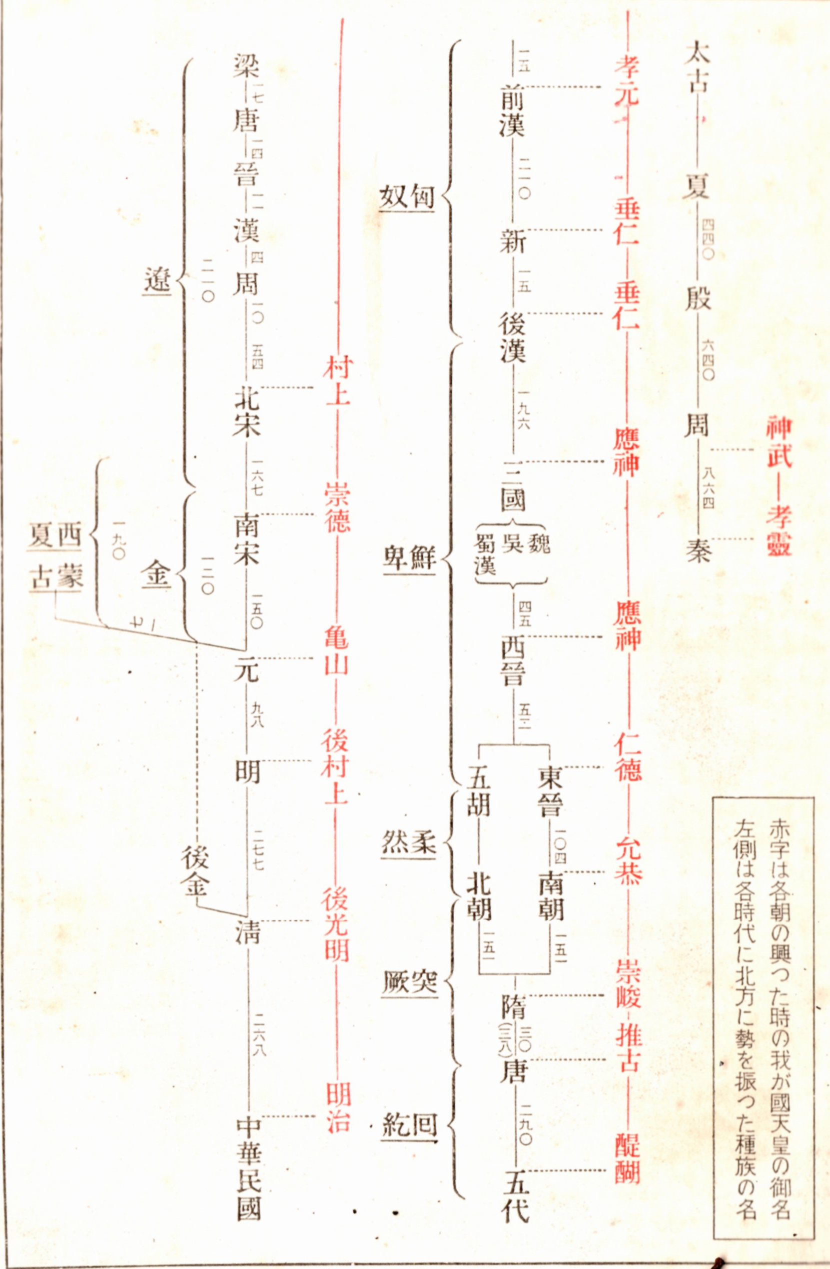
中等東洋史

中學校用

文學博士　羽田亨　著

東京　冨山房發行

歷朝名表



中等東洋史例言

一、この書は大概昭和十二年文部省改定の中學校教授要目に據り、中學校に於ける東洋史の教科書として編纂したものである。

二、本書の編纂に當つては、成るべく敍述を平易にし、字句も煩はしいものを避けることにつとめた。併しながら人名地名等を始め、或る特殊の語句に於いては、假令それが難字難句であつても、これをそのままに讀解することが、東洋史を學ぶ一つの目的であるやうな場合も少くない。それで本書に於いては、特にかかる名稱や語句を用ひた場合には、その初出の際に、一々振假名を附し、または簡單な解釋を加へ、これがために煩はされることの少いやうに意を用ひて置いた。

三、東洋史の學習に於いて、國史との聯關を重視しなければならぬことはいふまでもない。本書はこの點に注意して記述したが、別に重要事項の紀年及び年表等に於いて、この立場から苦心を重ねた。

四、本文中の重要事項には、記憶の便宜上西暦で年代を示したが、明治時代以後の事實については、我が年號に據る年月をも併せて記し、別に歴朝興亡の年

代や、特に必要あると認めた事項には、欄外に於いて對應の皇紀と天皇の御名とを示して置いた。更に卷首表紙見返しには歷朝名表を、卷末には年表を附し、前者に於いては、その興起の時代を我が天皇の御代に對照し、後者に於いては、主としてこの書に記した重要なる事實について、一々支那歷朝の天子、西紀・皇紀及び我が天皇の御名等を掲げ、且つ東洋史に關係ある國史の重要事項をも併記して、對照の便に供した。本書を用ひる人は、常にこれ等の表を利用することを忘れてはならぬ。

五、この書には、本文に記述した事項に關連して、諸所に史話、もしくはやや立ち入つた史實を記入した。讀者はこれによつて、本文の理解と記憶とを助け得ること少くないと信ずる。

六、地圖は卷末に挿入したものの外、必要に從つて諸所に切圖を掲げ、本文に記した事實について、地理上の知識を明らかにすることに注意した。

七、本書に收めた挿圖は、嚴密に注意して撰擇したもので、一々確かな出所のあるものである。これ等の圖を參照することは、一つには本文の理解を助け、また一つには歷史的の趣味を養ふことになるであらう。

昭和十二年六月　著者

中等東洋史（中學校用）目次

第一章　東洋史の意義……一
第二章　上代の支那……二
第三章　周代の制度・文化……八
第四章　古代の印度と佛教……一二
第五章　秦……一五
第六章　前漢……一八
第七章　後漢……二六
第八章　兩漢時代の文化……二九
第九章　三國・兩晉……三三
第十章　南北朝とその文化……三七
第十一章　隋……四二
第十二章　唐の初期……四六
第十三章　唐の中期及び末期……五〇
第十四章　唐代の文化・制度……五五

目次

第十五章　五代及び北宋……六二
第十六章　南宋……七一
第十七章　元（その一）……七七
第十八章　元（その二）……八一
第十九章　明（その一）……八九
第二十章　明（その二）……九二
第二十一章　明代の文化　歐人の東航……九四
第二十二章　清……九九
第二十三章　清代の制度及び文化……一〇三
第二十四章　歐洲諸國の東方經略（その一）……一〇八
第二十五章　歐洲諸國の東方經略（その二）……一一四
第二十六章　清と我が國……一一六
第二十七章　露西亞と我が國……一一九
第二十八章　清の滅亡　中華民國（その一）……一二三
第二十九章　中華民國（その二）……一二六
第三十章　滿洲帝國の建設……一三〇
第三十一章　東洋の現狀と國民の覺悟……一三四

中等東洋史

中學校用

文學博士　羽田亨　著

第一章　東洋史の意義

東洋史の範圍

東洋史は亞細亞大陸の中、我が國を別にして、大概印度以東、殊に支那及びその附近並びに南洋の一部に據つた諸國・諸民族の活動の跡を一般に述べる歷史である。

東洋史上の土地及び民族

この廣い地域には、古來支那の漢族、印度のアーリヤ族(Aryans)を始め、西藏（チベット）高原の西藏族、北方曠野地帶の蒙古・トルコ族、滿洲のツングース族、南方のマライ族等、諸種の民族が住み、氣候・風土の異るにつれ、農耕・遊牧等それぞれ適宜の生業を營んで今日に至つた。

東洋史上に於ける支那の地位

中でも漢族の建てた支那は、昔から政治・經濟・文化等あらゆる點に於て最も發達した國であつたから、その影響は絶えず周圍の諸方に及んだ。我が國も常にこれと密接の關係を保ち、我が文化の

我が紀元前凡そ三〇〇〇年頃

東洋史學習の目的

發達を助けたこと甚だ多かつた。　されば東洋史の學習は、支那を中心とする東洋諸國・諸民族の歴史を知つて、現在の情態を正しく理解することを主要なる目的とすると共に、國史に關する知識を明確にする爲にも、また必要であることを知らねばならぬ。

第二章　上代の支那

漢民族

黃帝の建國

堯・舜の世

北方支那の黃河沿岸地方には、太古から今の支那人の祖先である漢民族が、多くの部落に分れて住んで居つた。　傳說によると、今から凡そ四千六百餘年前に黃帝(クワウテイ)といふ君主がその中から出て、これ等の諸部落を從へ、始めて統一した國家を建て、その後堯・舜(ゲフ・シュン)といふ二人の聖人が相ついで君主となり、後世堯・舜の世と稱して讚美する太平時代が現れたといはれて居る。

夏

併しながら、この地方に稍々有力な君主が出たのは夏(カ)の時代からのことである。　北方支那では屢々、黃河の水が氾濫(ハンラン)し、住民はその害に苦

我が紀元前凡そ二〇〇〇年頃

禹

しめられたが、禹(ウ)といふ人が熱心に治水事業に從事して大いに人望を得、遂に君主となつて國を夏と號した。　これが我が紀元前凡そ一千五百年頃、西曆紀元前凡そ二千二百年頃のことと考へられて居る。　この後、夏は禹の子孫が代々王位を繼ぎ、四百餘年を經て桀(ケツ)王が立つた。　桀王は暴虐の君主で、全く人望を失つたので、殷の湯王はこれを滅ぼし、代つて位に卽いた(紀元前一七六〇頃)。

王位の世襲

殷

殷代には既に多少農業も行はれたが、生業としてはなほ狩獵を主として居つた。　從つて一般に人智の發達も幼稚で、少しく重要なことはみな卜(ウラナヒ)によつて定めるのが常であつた。　その方法は獸骨・龜甲などを火で燒いて、その割れ方を見て判斷した。　次頁の圖は、殷代に卜に用ひられた獸骨で、表面に刻まれた文字は卜の文句である。

古代の生業と卜



禹王の廟　浙江省紹興縣に在る。

我が紀元前凡そ四五〇年頃


殷代の文字

近年河南省の殷の都趾から多數發見せられた中の一で、文字は今日に知られて居る最古の漢字である。

湯王

殷は湯王以後六百餘年の間その子孫が位を嗣いだが、紂王に至つて暴虐を極めたので、周の武王の爲に滅ぼされた（紀元前一一二〇頃）。

革命

かくの如く湯王は夏を滅ぼし、武王は殷を滅ぼして君主となつた。これが即ち革命である。支那では君主は天の命を受け、天に代つて萬民を愛撫する有德の人であるとしてこれを天子と稱した。だから天子が不德であれば天の命が革まると考へ、有德の人が代つて天子となることを否まない。

我が國體と支那の國體との相違

從つて革命はこの後も幾度となく起るのであつて、我が尊嚴なる國體とは全く相異るところである。

我が紀元前一一〇年

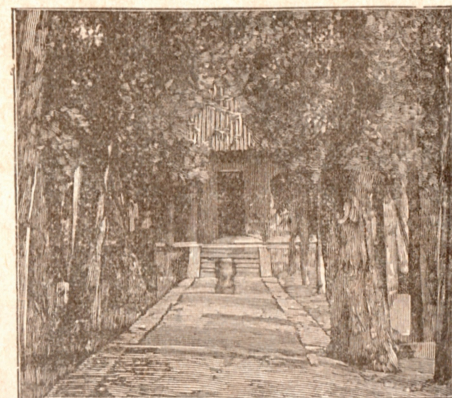
周

周の武王の封建制度

武王は鎬京（陝西省長安縣）に都を置き、その一族や功臣等にそれぞれ領地を與へて諸侯とし、王室を保護する藩屏とした。謂はゆる封建の制度である。

周公

間もなく武王は死んでその子成王が立ち、武王の弟周公（名は旦）が攝政した。周公は聖人と呼ばれる人で、よく政を治め、周の國運の基礎を固めた。周代の完備した諸種の制度は、永く後世に模範となつたが、その根本は實に周公の定めたものである。


周公の廟（山東省曲阜縣城内に在る。）

周の東遷

武王の十一世の孫に當る平王の時に、周は西方の犬戎種族の侵入を避けて、都を東方の洛邑（河南省洛陽縣）に遷した（紀元前七七〇）。

春秋時代

平王の末以後凡そ二百五十年間は春秋時代である。この名は孔子の作つた春秋といふ書に、當時の歷史を書いてあるところから起つた。

周の衰微と覇者

春秋時代には、周の王威は大いに衰へ、内は諸侯を抑へることが出來ず、外

戰國時代

齊の貨幣 刀貨と稱するもので、表面に刻した文字は「齊法貨」三字の古文である。

戰國の七雄と秦の富强

からは頻りに外民族の侵入を蒙つたので、齊の桓公・晉の文公などの大諸侯が交〻立つて尊王攘夷を唱へ、小諸侯を統率した。これが霸者である。かくてこの時代には、周の王室はこれ等の霸者の力によつて、纔にその體面を保つて居つた。



然るに春秋時代の後、凡そ八十年を經て謂はゆる戰國時代に入ると、世は全く實力競爭の姿となり、强大な諸侯は自ら王と稱し、互に併呑を事としたので、周はただ洛邑附近を領する一小諸侯たるに過ぎない有樣になつた。かかる時代が凡そ二百年間ばかり續いたが、この頃春秋時代の諸侯は大概滅亡し、ただ秦・楚・燕・齊・韓・魏・趙の七國が盛んであつた。中でも西方險要の地に據つた秦は最も富强で、戰國時代の初期に出た孝公の時に、商鞅といふ人を任用して益〻國力を固め、他の六國を威壓

我が紀元四〇四年、孝靈天皇の御代

秦の一統

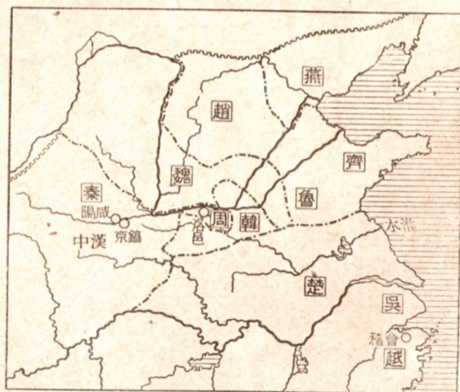
戰國時代の諸國

戰國時代の世相

蘇秦の立身

する勢であつた。

これに對して六國では、或時には蘇秦の合從策に從ひ、互に同盟して秦に當らうとし、また或時には張儀の連衡策に從ひ、秦に服從してその侵略を免かれようとしたが、何れも徒に苦心するだけで、大した效果も無かつた。その間に秦は益〻國力を養ひ、まづ周を滅ぼし（紀元前二五六）、ついで始皇帝の時、悉く六國を併せて天下を一統した（紀元前二二一）。



戰國時代は全く競爭の世の中で、才能さへあれば富貴も榮譽も得易かつたから、一介の書生で、一躍天下に號令するやうな位置に上るものも少くなかつた。蘇秦の如きはその例である。蘇秦は洛陽の人で、學業を修めた後、立身の道を求めて諸方に遊説したが目的を達せず、困窮して故郷に歸つた。時にその妻や兄弟等は、彼が辯説によつて身を立

てようとするのを嘲り、冷遇を極めた。そこで蘇秦は大いに憤慨し、更に工夫を重ねた後、從（南北）に六國を合同せしめて秦に當る策卽ち合從策に成功し、自らその同盟の長となり、六國の宰相となつた。その後彼が王者のやうな行列・荷物を整へて洛陽を通つた時に、前に彼を嘲つた親戚等は、その威光に打たれて正視することも出來なかつた。この有樣を見て、蘇秦は歎息して「此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎、且使我有雒陽負郭田（郊外の田地）二頃、吾能佩六國相印乎」といつたとのことである。

第三章　周代の制度・文化

周代に於ける支那文化の發達

支那の文化は周の時代に於て著しく進み、制度は完備し、學術は興隆し、永く後世の模範ともなり、基礎ともなつたのであつて、甚だ重要な意義を有して居る。工藝の如きも、或種類のものはまた大いに發達した。今、まづその制度を見ると、

官制

一、封建制度及び官制　前に述べたやうに、周は封建の制度を用ひ、國內の中央卽ち王畿と稱する地方を王の直轄地とし、その他の地方に、公・侯・伯・子・男の五爵に分けて、諸侯を分封した。中央政府には天・地・春・夏・秋・冬の六官を置いて、それぞれ諸政の總理・民治・祭祀・軍事・刑獄・殖產等の政務を司どらせ、諸侯もまた略、同樣の官をその國に置き、中央政府の監督を受けて領內を治めた。

田制・稅制

二、田制及び稅制　周の田制は謂はゆる井田法で、方一里卽ち九百畝の土地を百畝づつ井字形に九等分し、周圍の八分を八家に與へ、中央の一分を八家共同で耕作させ、その收穫を田租として納めさせた。周の一里は凡そ我が四町に當るから、一戶に與へられた土地の面積は容易に算出し得られるであらう。田租の外にも布縷の征といつて、家ごとに若干の絹を貢がせ、力役の征といつて、人ごとに一年の中三日間公の力役を勤めさせた。これが後世の租・調・庸の制度の基である。

軍制・學制

三、軍制及び學制　その他、軍制を定めて兵士を一般人民の間から徵集することとし、また學制を立てて大學や小學を設け、敎育の普及を

我が紀元一〇九年、綏靖天皇の御代

學術の興隆

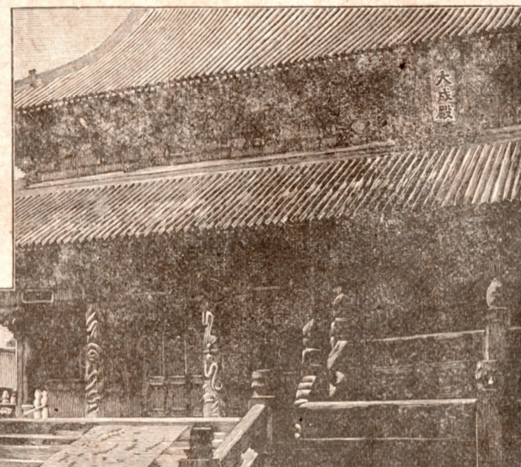
計つた。

次に學術興隆の有樣を見ると、周の末から春秋・戰國時代にかけ、時勢に應じて哲學・道德・政治・經濟・軍事など、諸種の學術が發達し、多くの學者が出て、それぞれ深奧なる學說を立てた。これ等の學者の中でも、特に有名なのは孔子と老子とである。

孔子

孔子は春秋時代の末（紀元前五五二）に魯の國（山東）に生れた人で、名を丘（キウ）、字（アザナ）を仲尼（チュウヂ）といつた。その學說は儒教といひ、仁を以て國を治めるのが要旨である。仁とは父母・兄弟に對する自然の愛情、卽ち孝悌の道を、他人の上にも及







孔子の墓及び孔子廟内の大成殿　廟は山東省曲阜縣城内に、墓はその城外に在る。



孔子像

この像は山東省曲阜縣の孔子廟内に安置せられて居るものである。

ぼすことに外ならぬ。　孔子は諸侯を訪うてこの教を實行せしめようとしたが、目的を達しないで魯に歸り、その後は子弟の教育や著述に從事した。儒教の經典として今も行はれてゐる易・詩・書・禮記・春秋の五經は、孔子の整理もしくは著作したものである。

老子

老子（李耳）は孔子とほぼ同時代に出た楚の國（河南）の人で、凡そ人はこの世の中の事に執着せず、無爲にして自然の道に從ふべきであると說いて、謂はゆる道家の學を開いた。

儒家・道家及び諸子百家

孔子の後、儒教學者即ち儒家には子思（孔子の孫）・孟子・荀子等が相ついで出で、それぞれ熱心にその說を唱へた。　儒家・道家の外にも諸種の學說、謂はゆる諸子百家の說が並び興り、楊子は個人主義の自愛說、墨子は極端なる博愛主義の兼愛說、商鞅や韓非は法家の說、即ち法を重くして國を治むべきを說



周代の銅器　尊といつて祭祀に用ひられた器である。

いた。

經濟の發達
工藝の進歩

周代には農業は益〻進歩すると共に、春秋時代の頃から商・工業も漸く發達し、貨幣も行はれた。工藝も進んで、銅器製作の如き技術は特に發達し、驚くべき精巧な器(ウツハ)が作られた。

周代の社會
階級制度
家族制度

周代には社會は天子・諸侯・大夫・士及び農・工・商を業とする一般庶民の階級に分れ、各階級間の分限は嚴重に定められた。また家族制度が發達して、家長・族長の下に一家・一族が從ひ、長幼の序によつて尊卑が分れた。この家族制度は長く後世まで行はれ、支那の社會組織の一つの特徴となつたが、階級制度は春秋・戰國時代に全く破れ、實力を以て自由に競爭するやうになつた。

第四章　古代の印度と佛教

佛教關係要圖

今より凡そ四千年ばかり前に、中央亞細亞からアーリヤ種族の一派が北方印度に入り、既に相當發達せる文化を有したその地方の住民を征服した。間もなく彼等の社會に僧侶・貴族・平民及び奴隷の四種姓の區別が出來たが、彼等の信仰した婆羅門(バラモン)(Brahman)教ではこの中僧侶が最も貴く、他の種姓は絶體にこれに服從しなければならぬと定められてあつたので、自然に僧侶は横暴となつて世人を苦しめ、甚だしき弊害を生ずるに至つた。



佛教といふ名の起り

支那に孔子が在世した頃に、中印度に釋迦が出で、これに對して平等無差別を唱へ、如何なる種姓の人でも淨く正しき道を行へば、みな同樣に佛(眞理を覺(サト)つた人の義)となり、一切の惱(ナヤミ)から脱することが出來ると教へた。釋迦の教を佛教といふのはこれが爲である。

經濟の發達

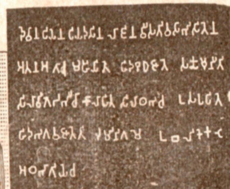
工業の進步

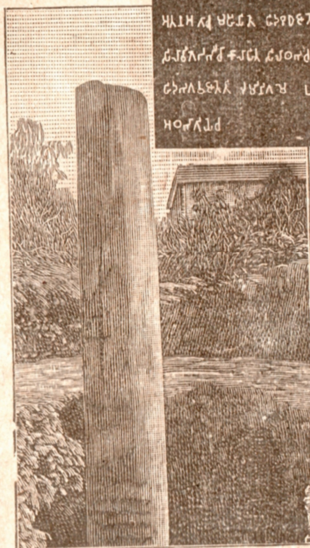
いた。

周代には農業は益々進歩すると共に、春秋時代の頃から商・工業も漸

釋迦の修業

釋迦は中印度迦毘羅城(Kapila)(ネパール國タライ地方)の王子で名を悉達(Siddharta)といつた。釋迦といふのは實は種族の名で、悉達が釋迦種族であつたから、かく呼ばれることになつたのである。釋迦は早くから人生に對する煩悶を懷いて居たが、二十九歳の時、世人の苦しみを救はうと決心し、王城を逃れて山中に入り、六年の難行の後、佛陀迦耶(Buddhagaya)に出て、そこの菩提樹の下で始めて覺を開き、佛となつた。その後四十餘年の間諸方に教を說き、八十歳で入滅した。その生時は孔子より十餘年前である。





釋迦誕生の地藍毘尼園の遺蹟　圖は阿育王が遺蹟に參拜した記念碑とその敕文とである。

佛敎の發展

阿育王

この後佛教は次第に世人の信仰を得たが、その大發展を見るに至つたのは、阿育王(Asoka)の時からである。王は釋迦の死後二百餘年を經て、中印度の摩掲陀(Magadha)國の王位に上り(紀元前二七二頃)、自ら佛教を信仰し、經文を編纂せしめ、また多數の布教師を諸方に遣はして、傳道せしめたので、

ここに佛教は錫蘭島を始め、廣く印度以外の地方にも行はれることになつた。

第五章　秦

始皇帝の新政

秦の始皇帝は咸陽(陝西、周の鎬京の北)に都した。始皇帝は、周の末から長く天下の亂れたのは、諸侯が各地に據り、朝廷の威光が行はれなかつた爲であると考へ、これまで行はれた封建制度を廢し、新たに全國を郡・縣に分け、それぞれ官吏を遣はしてこれを治めさせた。かくして天下は全く中央政府に直屬することになつた。

郡縣制度

そこで始皇帝は從來地方によつて異つて居た度・量・衡を一定し、區々であつた文字を改定するなど、諸種の新政を行つて天下一統の實を擧げることに努力した。

焚書坑儒

併し人民はこの新政に滿足せず、學者の中にもこれを誹るものが



秦權　始皇帝の時に作つた權の分銅。

古代の書籍

始皇帝の外征

少くなかつたので、始皇帝は李斯の意見に從ひ、民間にある書籍の中、政治に關するものを悉く燒き棄て、また政を誹つた書生四百六十餘人を坑に埋め殺した。かかる過激なる手段を用ひたのは、これによつて世人の政治知識の源を斷ち、新政に對する不平を除かうとする爲であつた。



この頃の書籍は竹や木の小片に文字を書き、それを編んで卷としたものである。この圖は甘肅省敦煌縣西方の沙中から發見せられた漢代の書籍で、木片に墨で書いてあるが、秦代の書籍も大概これと變りはなかつたと思はれる。

內に一統の功を成就した始皇帝は、外に向つてもまた大事業を成し、戰國時代以來屢、入寇した匈奴（蒙古族或はトルコ族といはれて居る）を黃河の北に擊ち退け、萬里の長城を築いて防ぎを固め、南方に於ては南越（安南族）を討つて、始めて今の安南地方に至るまで領土を擴めた。

戰國時代から燕・趙・秦等の諸國では、それぞれその北境に長城を築いて匈奴の侵入を防いで居つたが、始皇帝はこれを利用したり、或は新たに築いたりして、萬里の長城を作り上げた。この長城は西は臨洮（甘肅省岷縣）から起り、黃河の北方を河に沿うて東し、滿洲國遼陽縣の北方、その頃襄平といつた地に達したもので、實に驚嘆すべき大工事である。從つて多くの費用と人數とを要し、人民を苦しめたことはいふまでもない。かくて萬里の長城は、外敵匈奴に對する防ぎとはなつたけれども、却つて人民の怨を買ひ、內に敵を作る有樣となつた。但し當時の長城は土壘を主としたもので、今見るが如き完全なものではなかつた。



萬里の長城　北京の西北約二十里に當る八達嶺附近の長城で、明代に築いたものである。秦代のものではない。

我が紀元四五五年、孝元天皇の御代

支那といふ國號

かくの如く漢族の勢力は始皇帝の時代に大發展をなし、秦の威名は遠く諸外國にも轟き渡つた。外國では秦といふ名を訛つて、シナと呼ぶものもあつたので、それが本になつて、遂に支那といふ國號を生ずることになつた。

秦の滅亡

始皇帝はかく目覺ましい事業を内外に成就したが、國民は却つてその激しい壓制と重い負擔とに苦しみ、始皇帝の死後、政治の亂れたのに乘じ、諸方に叛亂を起した。中にも江東(江蘇)の項羽と沛(江蘇)の劉邦との二人は最も勢力を得、劉邦は進んで咸陽に入り、秦を滅ぼした(紀元前二〇六)。

第六章　前漢

項羽と劉邦との爭

秦の滅亡後、項羽と劉邦とは互に權力を爭うて戰つたが、劉邦は部下の三傑張良・蕭何・韓信等と謀り、遂に項羽を烏江(安徽)に攻め滅ぼして帝位に即いた(紀元前二〇二)。これが漢の高祖である。

漢の初世

高祖は故の周の都であつた鎬京を帝都とし、これを長安と名づけた。

封建・郡縣兩制の併用

さて高祖は封建制度にも、郡縣制度にも、それぞれ長所もあれば短所もあると考へた結果、新たに兩制度を併用することとし、中央に當る天子の直轄地には郡縣制度を行ひ、その以外の遠隔の地には一族や功臣を分封して諸王とした。



漢の高祖の像

呉楚七國の亂

かくして國運の長久を計つたにも拘らず、高祖の後一代を經た文帝の時代には、これ等の諸王の勢は强大となつて朝命に從はず、文帝の子景帝の時には、諸王の國でも最も勢力のあつた呉・楚等の七國が連合して叛いた。

封建制の廢滅

景帝はこの亂を平げた後、諸王を都に留め置き、その領地には中央政府から官吏を遣はして政を治めさせることにした。そこで諸王はただ領地の租税を受取るだけで實權は無くなり、天下の政權は全く中央政府に歸することになつた。

文帝の仁儉

文帝は有名な仁君であつた。當時は殘酷な刑罰が多く行はれ、死罪の外にも刖(ゲツ)といつて足の筋を切つたり、劓(ギ)といつて鼻を削いだり、黥(ゲイ)といつて入墨をしたりしたが、文帝は一度罪を犯したものが、かくの如くにして刑罰を受けた不具者として一生を過さねばならぬのを憫(アハレ)んで、一時の苦痛ですむ笞(チ)刑(杖で撃つ刑罰)を以てこれに代へた如きはその一例である。また帝の質素儉約も有名なことで、在位中、宮殿や庭園の手入れをせず、身のまはりのものも新調しなかつたといはれて居る。嘗て露臺を作らうとしたが、その費用が百金かかると聞き、百金は中産者十家の財産に當るといつて、その營造を見合はせた。かく仁愛に深く、質素を旨として政を治めたので、國庫は充實し租税を減免することも數度に及び、國民はみな太平を樂しんだ。

武帝の功業

文帝・景帝の二代を經て、財政は豐かになり、朝廷の威光も振つた時に、景帝の子の武帝が位に即いた(紀元前一四一)。武帝は天性英邁な君主であつた上に、かかる好い時に出たので、この國力を利用して、内には文運を盛んにし、外には諸方を征伐し、空前の功業を立てた。文運の興

隆については後に讓り、まづ外國との關係について述べよう。

匈奴との關係

第一には匈奴との關係である。匈奴は秦の時に北方に逐はれたけれども、その後また勢力を恢復し、屢〻漢に侵入した。漢では高祖の時以來、匈奴の單于(ゼンウ)(匈奴の王號)に帝室の女を降嫁せしめたり、または多くの絹や食糧を贈りなどして、和睦の方針を取つたが、武帝はこれを遺憾に思ひ、中央亞細亞の大月氏(ゲツシ)國(アム河の北方)と同盟して匈奴を討たうとし、その爲に張騫(チヤウケン)を大月氏國に遣はした。この同盟は成立しなかつたが、その後、武帝は屢〻軍を出して匈奴を討ち、遂にこれを戈壁(ゴビ)(漢の沙漠)の北に退けた。

張騫の遠征



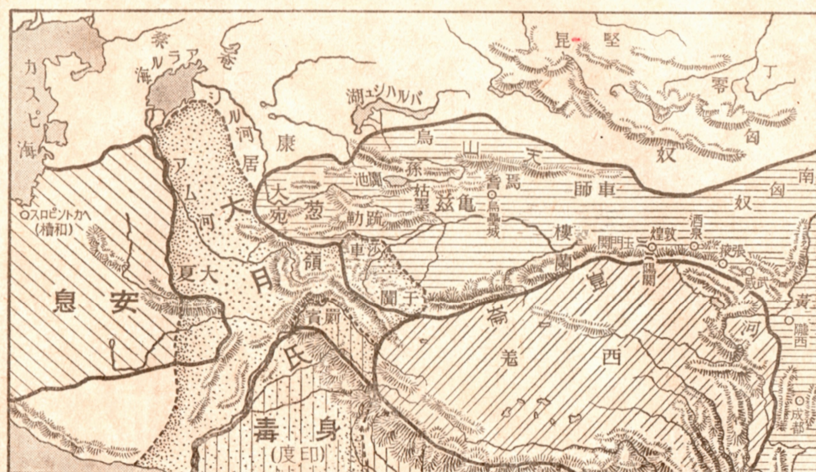
戈壁の光景

西域諸國との關係

第二には西域諸國との關係である。張騫の大月氏國に使したことは、東洋史上の重要事件で、これが本になつて、始めて漢と西域諸國との間に公の交通が開かれ、遠く安息(アンソク)(波斯)・身毒(シンドク)(印度)等とも、使を往來せし

（普通西域といふ名は支那本部と葱嶺との間に横たはる地を指すが、時には西方一帯の地方に更に用ひられる。）

漢代西域圖



大宛征伐

め、互に物産を交易することになつた。當時西方から輸入されたのは、馬や葡萄などの動植物を主とし、漢から輸出したのは、絹や鐵器などの工藝品が重なるものであつた。かくて漢は富國として西域諸國から重んぜられたが、葱嶺（ソウレイ）（パミール）の北麓の大宛（ダイエン）國では、漢が頻りにその國の名馬を求めるのを嫌つて、漢の使を殺したので、武帝は軍を出して大宛を攻め降し（紀元前一〇一）、大いに武威を輝かした。

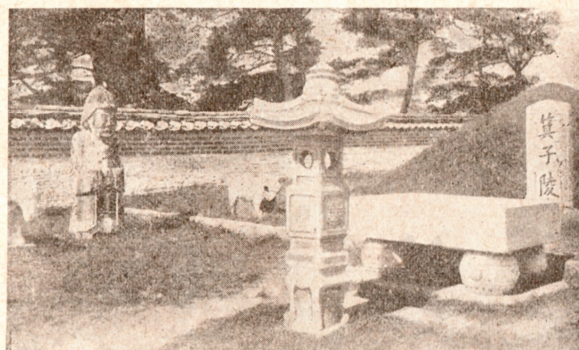
張騫鑿空

張騫は漢中（陝西）の人である。武帝の命を受けて遠征の途に就いたのは建元三年（紀元前一三八）であつた。途中匈奴の爲に捕へられ、以後十一年間を敵中に過した。

それでも志を屈しないで、遂に匈奴の地を逃（ニゲ）出し、大宛・康居（カウキョ）（大宛の北から西に接した地方）を經て大月氏國に達した。歸途また匈奴の捕虜となり、一年餘り拘留せられた後、再び逃れて歸國した。出發以來十三年目である（紀元前一二六）。この大旅行によつて、漢は始めて西方の事情を知ることが出來た。張騫がどの道を通つたかは明らかでないが、何れにしても、今の天山南路の沙漠の間に、水や糧食の缺乏に苦しみながら彷徨したに違ひない。出發の際には一行百餘人であつたのに、歸つた時には、ただ一人が從ふに過ぎなかつた。その中には、捕虜として敵の中に生涯を終つたものもあつたであらうし、途中に斃れたものもあつたと思はれる。この十三年にも亙る長い年月を、よく辛酸困苦に打勝つて、初めの目的を貫いた張騫の絶倫の勇氣と、不屈の志とは、眞に懦夫（ダフ）をして立たしめるもので、感歎に堪へない。この後、張騫は武帝に勸めて、今の四川・雲南地方から印度に通じる道を開かうとし、ついで今の伊犂（イリ）地方に據つた烏孫（ウソン）との同盟を結ぶ爲に、また自らその國に使した。かくて漢と西域諸國とは、張騫の旅行によつて始めて相通ずることになつた。張騫鑿空（サククウ）（鑿は孔をつの義）といふ語は、この有様をいつたのである。

朝鮮との關係

第三には朝鮮との關係である。當時朝鮮半島には、南に馬韓・弁韓・辰韓といふ三韓が分立し、北には遼東から大同江の南にかけて朝鮮の國があつた。



箕子の陵　朝鮮平壤の北に在る。

箕子の朝鮮

初め殷の亡びた時に、その王族の箕子といふ人が逃れて朝鮮の王となり、王險城平壤に都し、その後箕子の子孫が長く王位を繼いだと傳へられて居る。

衞滿の朝鮮

然るに漢の初め頃に燕の衞滿といふ人が朝鮮を奪ひ、武帝の時にはその孫の衞右渠が王位に在つたが、武帝はこれを討滅ぼし、



三韓及び漢の四郡の圖

漢の四郡

その地に漢の四郡眞番・臨屯・樂浪・玄菟を置いて統治した（紀元前一〇八）。そこで三韓は、北方に於て直ちに漢と接することになり、三韓と往來して居つた我が國人も、またこれと交通することになつた。

武帝の晩年

武帝は以上の外にも、秦の末に獨立した南越を征服し（紀元前一一一）、また雲南・貴州地方の西南夷を從へ、秦の始皇帝時代にも優つて漢族の勢力を外に發展せしめた。併し武帝はかかる經略の爲に多くの軍費を使ひ、その上に宮殿庭園等の大工事を起して奢侈に耽つたので、流石に豐かであつた財政も、晩年には甚だ困難になり、國民は重税に苦しみ疲弊に陷つた。

前漢の中興と滅亡

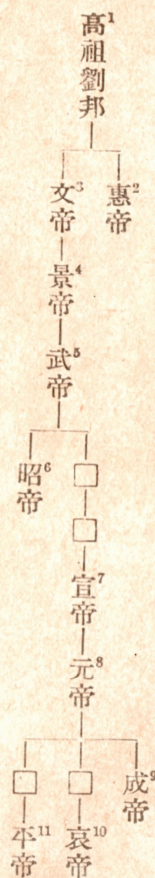
武帝の曾孫の宣帝は英明な君主で、良吏を任用して善く内政を治め、外に向つても葱嶺から東方の西域諸國を服屬せしめ、匈奴を降し、國運を中興した。

王莽の簒立

併し宣帝以後は明君が出ず、外戚の王氏が權力を振ひ、その一族の王莽は、遂に天子の位を簒つた（紀元八）。高祖が國を立

我が紀元六六八年、垂仁天皇の御代

てから二百十年を經て、ここに漢は一旦滅亡した。



第七章　後漢

王莽の滅亡

王莽は國を新と號し、周代の制度を再興して理想的の政治をしようとしたが、國民は却つてその革新を喜ばず、その上重い租税を課せられたので、間もなく諸方に叛亂を起した。この機會に乘じて漢の一族もまた兵を擧げ、長安に入つて王莽を殺した(二三)。新の建國後僅に十五年目のことである。

漢の復興

當時漢の一族劉秀は最も人望が高かつたので、遂に推されて帝位に即き、洛陽に都した(二五)。これが後漢の光

我が紀元六八五年、垂仁天皇の御代

武帝である。

後漢の盛時

光武帝は專ら内治に力を盡し、親ら政を行ひ、固く外戚の政治に與(アヅカ)ることを禁じ、また節義を尊び、前漢の末以來墮落した士風を振ひ興すことに努力した。光武帝の子の明帝、孫の章帝等もみな名君で、内外の政治に勉めたので、後漢の勢はこの頃最も盛んであつた。

後漢と外國との關係

當時に於ける外國との關係を見ると、

匈奴・西域の經略

匈奴は王莽の時からまた叛き、西域諸國もその下に附いたので、明帝は軍を出して匈奴を討ち、別に班超(ハンテウ)を西域に遣はしてその地を經略せしめた。章帝の子和帝の時に、また匈奴を討つて遠く西方に逐拂ひ、西域諸國も班超の力によつて、全く漢に歸服した。

大秦との交通

この頃大秦國(羅馬(ローマ)帝國)は西方亞細亞をも領有し、勢盛ん


王莽の制定した量(マス)　中央は一斛(コク)、左は一升、右は一合

後漢の衰運

西方に於ける絹の聲價

であつたので、班超はこの國とも交通しようとして使を出したが、あまりに遠い爲に目的を達しなかつた。その後、後漢の末に近い桓帝（和帝から八代目）の時に、大秦王安敦（アントン）(Antoninus)の使と稱するものが、始めて海路から漢に來て（一六六）、兩者の交通が開かれ、以後大秦の商人は日南（東京（トンキン））地方に來て貿易に從事した。


大秦王安敦の像

大秦人の支那貿易は、主として絹を得るのが目的であつた。絹は古くは希臘（ギリシヤ）羅馬を始め、西方諸國では産出せず、支那から西域・波斯・印度等の商人の手を經て輸入した。從つてこれ等の地方では、絹は非常に高價な貴重品で、時には黄金と同一目方で賣買せられたといはれて居る。

外戚の政權に與ることは、かねて光武帝の戒めたところであつたに拘らず、和帝の時からまた代々この弊害が現れた。桓帝は宦官（クワングワン）の力によつて外戚を倒したけれども、その結果新たに宦官が外戚に代つて跋扈（バツコ）することになり、政治は益〻亂れた。次の靈帝の時に、袁紹（エンセウ）といふ人が悉く宦官を殺してその禍を除いたが、しかも後漢の勢はこの頃全く衰へ、天下は群雄割據の有樣となつた。

第八章 兩漢時代の文化

國民思想の統一と儒教の興隆

秦の始皇帝が焚書坑儒の暴政を行つた結果、文運は一時衰へたが、前漢の時代になつてから次第に復興し、武帝の位に即いた頃には、儒家・道家・法家など諸種の學派がまた對立した。そこで武帝は董仲舒（トウチユウジヨ）の意見に從ひ、儒教を以て國民思想を統一することに定め、大學を設けて儒教の教育を施した。これから儒教は支那の國教の如くになり、後にはただに支那ばかりでなく、朝鮮から我が國にも及び、廣く東洋の政治・道德の中心思想となるに至つた。

儒學

訓詁學

兩漢時代の儒家は、儒教の根本思想を論述することよりも、その經典の字句を説明することに力を用ひた。謂はゆる訓詁（クンコ）學である。

史學　**史記・漢書**

多くの學者があつた中にも、後漢の末に出た鄭玄は特に有名である。

この時代には儒學の外に歴史の學問も盛んに行はれ、前漢の武帝の時には司馬遷が出て史記を作り、後漢の和帝の時には班固が出て漢書を著はした。史記と漢書とは共に史書としての傑作で、後世から模範とせられて居る。

美術・工藝

美術・工藝の如きも著しく發達したことは、近頃諸方から發見せられるこの時代の諸種の遺物、例へば圖に示した漆器や銅鏡を見ても明らかで、その精巧なる技藝に驚かざるを



漢代の銅鏡



漢代の漆器　外蒙古庫倫(ウルガ)附近の古墳から出たもので、漢の哀帝建平五年(西紀前二)の作である。

桓帝の時代は我が成務天皇の御代に當る

得ないであらう。

迦膩色迦王と佛教の隆盛

印度の佛教は後漢の半頃大月氏國に迦膩色迦(Kanishka)王が出て、西北印度から恒河(Ganges)の中流に至る地方を領有し、大いにその傳播に盡力するに及んで益盛んとなつた。

後漢に於ける佛教の流行

支那には既に前漢の末頃からこの教が傳はつたけれども、まだ一般に行はれるには至らなかつたが、後漢の桓帝の時から、大月氏を始め西域諸國の僧侶が相ついで支那に來て、熱心に布教に從ひ、經文をも翻譯したので、この頃から次第に世間に流行するに至つた。



迦膩色迦王の貨幣

ガンダーラ美術

佛教は西北印度カブール(Kabul)河流域のガンダーラ(Gandhara)地方に移住して居つた希臘人の間にも信仰せられ、それにつれて佛教思想を希臘式美術で現すことが行はれて來た。これがガンダーラ美術と呼ばれる流派である。この美術は迦膩色迦王の頃極盛となり、佛教の東方傳播に伴つて西域諸國から支那にも傳へられ、更に我が國にも波及した。



漢代の彩畫漆篋

漢代の彩畫漆篋

これは朝鮮平壤の郊外、漢の樂浪郡の古墳から出た細い竹を編んで作つた篋で、後漢時代の製作と認められる。篋の周圍や四隅に附けた漆塗りの枠には、裝飾文樣の外に、熟達した手腕で、孝子烈女等の說話が美しい彩色を用ひて巧に畫かれてある。當時既にかかる立派な美術が發達して居つたことは、近頃になつて始めて知られたことである。

兩漢時代の社會

戰國時代の頃から漸く盛んになつた商業は、漢代に於て益〻發達し、大商人や富豪が諸方に現れたが、多數の農民は貧困に陷り、田地を富豪に兼併せられ、その身を賣つて奴隷となるものも多かつた。かかる著しき貧富懸隔の有樣は、兩漢時代を通じて除くことが出來ず、社會は常にこれ等の富豪・巨商等の勢力によつて動かされ、諸種の弊害を生じた。

第九章　三國　兩晉

天下三分

曹操・劉備・孫權

後漢は靈帝の時代に於て、群雄割據の有樣になつたことは前に述べたが、これ等の群雄中、曹操は靈帝の子の獻帝を迎へて許(河南)に據り、遂に江北地方を平定した。この時漢の一族劉備は夏口(湖北)に據つて曹操の南下を防がうとし、援を江東(揚子江下流の南地方)の孫權に請ひ、力を協せて大いに曹操の軍を赤壁(湖北)に破つた(二〇八)。

赤壁の戰

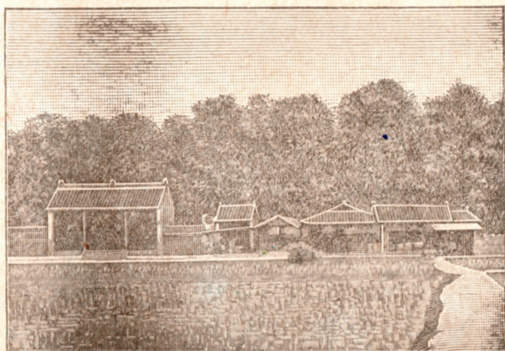
劉備の臣に諸葛亮(字は孔明)といふ智謀に勝れた人があり、劉備に勸め、巴蜀漢中の地方を平定して成都(四川)に據らせたから、天下は曹操・孫權・劉備等三人の分領するところとなつた。

三國の鼎立

後漢の滅亡

曹操の死後、その子曹丕は獻帝の位を簒ひ、國を魏と稱して洛陽に都した(二二〇)。これが文帝である。後漢は光武帝以來百九十六年を經て滅亡した。そこで劉備も翌年蜀漢國を建て、その後八年を經て、孫權もまた吳國を建て、建業(江蘇今の南京)に都し、三國が鼎立することになつた。この中蜀漢は最も小國であつたが、諸葛亮はよくその勢を支へ、屢〻軍を率ゐて魏を討つた。しかし魏にも司馬懿(字は仲達)といふ名將があつて蜀軍を防いだので、亮は志を達しないで死んだ(二三四)。

我が紀元八八〇年、神功皇后攝政の御時代



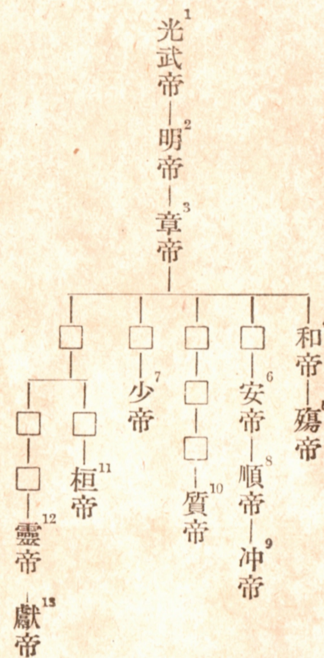
昭烈帝(劉備)及び諸葛亮の廟　四川省成都縣城内に在る。左端は孔明の祠堂で、右は昭烈帝の廟である。

劉備と諸葛亮

諸葛亮は普通に孔明といふ字で知られて居る。襄陽縣(湖北)の西に當る隆中の山中に草廬を結んで隱栖して居たが、世間ではその才智を知つて

伏龍・臥龍等と呼んだ。劉備は孔明の名聲を聞いて、自らその草廬を訪ねたが、孔明は容易に面會せず、三度目に始めてその熱誠に動かされて會見し、劉備に仕へることになつた。この後劉備は全く孔明に信賴し、孔明も主君の爲に全力を盡し、その間柄は非常に親密であつた。そこで前から劉備に從つて居た關羽・張飛等はこれを悅ばず、不平を述べたが、劉備は「孤之有孔明、猶魚之有水也、願諸君勿復言」といつてこれを退けた。劉備の事

後漢諸帝略系



晉の建國は我が九二五年、神功皇后攝政の御時代

出師表

業は、大部分孔明の計によつて成されたといつても過言ではない。劉備の死後、孔明は遺詔を受けて、その子劉禪を輔け、内に在つては政を治め、外に向つては自ら軍を率ゐて屢々魏を侵し、よく魏・吳に對して蜀漢の勢を支へた。有名なる前・後出師表は孔明が劉禪に上つたもので、言々肺肝より出で、その忠誠の情は深く人をして感動せしめる。

晉の一統

諸葛亮が死んでから、蜀漢の勢は次第に衰へ遂に魏の爲に滅ぼされた(二六三)。然るに魏もまた司馬懿の孫に當る炎の爲に滅ぼされ、炎は洛陽に都して國を晉と號した(二六五)。これが武帝である。當時吳では孫皓(孫權の後三代目)が帝位に在つたが、暴虐で人望の無かつたのに乘じ、武帝はまた吳を滅ぼし、天下を統一した(二八〇)。

晉の衰運

武帝は封建の制度を復興し、一族を要地に分封して諸王としたが、

八王の亂

これ等の諸王は漢の時と同じやうに次第に強大となり、武帝についで惠帝が立つと、八人の諸王が互に政權を得ようとして爭つた。その

清談の流行

上、當時道家の學と共に清談の風が流行し、世事を度外視して空論

我が紀元九七七年、仁德天皇の御代

五胡の侵入と晉の南遷

に耽るものが多かつたので、晉の國勢は大いに衰へた。

これより先、匈奴・羯（ケツ）（匈奴の別種）・鮮卑（センピ）（蒙古族）・氐（テイ）・羌（キャウ）（共にチベット族）など、五胡と總稱せられる塞外（長城の外方）の民族が、今の山西・陝西・甘肅等の地方に多數移住したが、晉の時代にはその數が益〻增加した。

匈奴の劉淵

この中の匈奴の酋長に劉淵（エン）といふ人があつて、かねてから大望を懷いて居たが、晉の國勢の衰へたのに乘じ、自ら國を建てて漢と稱し、平陽（山西）に都し、その子劉聰（ソウ）は晉の懷帝（惠帝の弟）を擒（トリコ）にし、ついで位に卽いた愍（ビン）帝をも捕へた。そこで司馬懿の曾孫元帝は南に遷つて建康（もとの建業）に都し（三一七）、僅に江南の地を保つた。

西晉・東晉の稱呼

それでこの以前を西晉、以後を東晉といふのである。



函谷關の景（河南省靈寶縣の南に在る。）

前秦及び後魏の江北一統

晉の南遷後、江北には五胡や漢族が諸方に國を建てた。その中、氐種族が關中（函谷關以西の地）に建てた前秦は、苻（フ）堅（ケン）が王となつてから盛大になり、遂に江北を一統した。

淝水の戰

そこで苻堅は更に大軍を率ゐて東晉を征伐しようとしたが、淝（ヒ）水（スヰ）（安徽）の一戰に大敗し（三八三）、雄圖空しく挫折した。その後間もなく前秦は亡び、江北はまた諸國分立の有様となつたが、鮮卑種族の建てた後魏が次第に盛んになり、太武帝の時に全く江北を一統した（四三九）。

東晉の滅亡

我が紀元一〇八〇年、允恭天皇の御代

淝水の戰の後、東晉では頻りに内亂が起つて國勢振はず、遂に將軍劉（リウ）裕（ユウ）の爲に國を簒はれた（四二〇）。劉裕は國を宋と號し、建康に都した。これが武帝である。そこで後魏は江北、宋は江南を領し、支那は南北の兩朝に分れることになつた。

第十章　南北朝とその文化

南北朝（この宋・齊・梁・陳の四朝と、前の吳・晉とを合して六朝と稱する。みな建康に都した。）

南北兩朝の對立は凡そ百五十年間に及んだ。この間南朝では宋・齊・梁・陳の四朝がかはるがはる興亡し、北朝も東魏（都は鄴（ギョウ）（河南））・西魏（都は長安）の二國に分れ（五三四）、東魏は北齊に、西魏は北周に簒はれ、その後、北周は北

隋の建國は我が紀元一二四一年、敏達天皇の御代

後魏の太武帝と孝文帝

孝文帝の經略

孝文帝の改革

齊を併せたが、また間もなく外戚の楊堅に滅ぼされた(五八一)。楊堅は即ち隋の文帝である。これ等諸朝の對立した有樣を表で示すと次の如くである。



後魏の君主の中で、特に有名なのは太武帝と孝文帝とである。太武帝は西域諸國を入朝せしめ、また漠北一帶に勢を振つた柔然(また蠕蠕ともいふ)を討破つたのみならず、宋とも戰つて領土を擴めたので、魏の國勢は盛大となり、遠く波斯地方からも修交の使を送つて來た。孝文帝は太武帝の後二代を經て位に即いた(四七一)。この頃後魏はなほ固有の國俗を保つて居たが、帝はその野鄙を厭ひ、都を平城から洛陽に遷し(四九四)、諸種の制度を始め、言語・風俗までもみな支那の風に改めた。

梁の武帝

南北朝時代の佛教

雲岡・龍門の石窟寺及び敦煌の千佛洞

その結果、後魏の文化は進歩したけれども、剛健な國民性は失はれ、國運は次第に衰へた。

後魏の孝文帝にやや後れて、南朝では梁の武帝が立つた(五〇二)。武帝は自ら博學であつたのみならず、大いに學問を奬勵したので、南朝の學術はこの時代に著しく發達した。併し帝は晩年に近づいてから佛教に心醉し、その極、遂に國運の衰退を招いた。

佛教は當代盛んに流行し、有名な鳩摩羅什を始め、西域諸國の高僧が續々支那に來て布教や經文の翻譯に從事し、支那からも法顯・宋雲等が求法の爲に遠く西域・印度等に旅行した。かく佛教が流行したので佛教美術もまた大いに發達した。今も雲岡(山西)・龍門(河南)の石窟寺や、敦煌の千佛洞などには、この時代の彫刻や繪畫が保存せられて、その面影を傳へて居る。

石窟寺とか千佛洞とかいふのは、山の斷崖絶壁を利用して多數の洞窟を穿ち、佛像を彫刻し、石の少い山では、漆喰で佛像を作りつけたもので、印

度や西域諸國に行はれた風を傳へたのである。

雲岡の石佛

雲岡は魏の初に都した平城、卽ち今の山西省大同の附近に在り、龍門は孝文帝の遷都した洛陽の附近に在る。どちらにも魏を始め北朝時代の石佛が殘存し、ガンダーラ式美術の輸入せられた面影を留めて居る。敦煌の千佛洞はこれより以前の東晉時代に既に開かれ、その後次第に増加した。



この洞窟には魏の時代の繪畫も殘つて居る。

道教

佛教と共に道教もまた行はれた。道教は後漢の末に張道陵(チャウダウリョウ)の開いた教で、道家の說に基づいた卑俗の信仰に過ぎなかつたが、その後漸く佛教を取入れて宗教としての形を整へ、佛教と勢を競うた。後魏の太武帝の如きは熱心にこれを信仰し、遂に法令を出して佛教を禁止するに至つた。

南方の開發

さて、この時代の文化について、大體の上から特に注意すべきことは、南方支那の文化の進步したことである。元來支那の文化は、北方



(上) 敦煌千佛洞の佛壇



(下) 敦煌の千佛洞全景

に據つた漢民族の間に發達したのであるが、晉が南に遷つた時に、多くの漢民族が南方に移住したので、これより後は從來野蠻と見られてゐた江南地方が、却つて漢文化の中心地となり、既に東晉時代に王羲之書・顧愷之畫・陶淵明詩など有名な文藝の士を出し、南北朝時代に入つてからも謝靈運・沈約の如き文學者が相ついで出た。



顧愷之筆女史箴圖

王羲之の書

我が紀元一二四九年、崇峻天皇の御代

魏晉南北朝時代の社會

魏晉以來南北朝の末に至るまでの六朝時代は、門閥の非常に重んぜられた世の中で、何事につけても貴族と庶民との間に社會的分限が定められ、これを越えることは出來なかつた。官吏も家柄によつて任用せられ、一般庶民は才能があつても出世の望はなく、ただ貴族の跋扈の下に驅使せられる有樣であつた。

第十一章　隋

隋の一統

隋の文帝が位に即いた頃、南朝は陳の時代で、その國勢が振はなかつたから、文帝はこれを討滅ぼして南北を合一した（五八九）。東晉が江南に遷つた時から二百七十二年を經て再び天下が一統に歸したのである。

煬帝　外國經略

文帝は內治に力を用ひ、國力の充實を計つたが、その子煬帝は頻りに外國を經略し、或は西域諸國に諭して入朝せしめ、或は林邑（交趾支那）・流求（臺灣）等を征服するなど、大いに國威を外に輝かした。我が聖德太子が小野妹子を使として始めて支那と國交を通じさせられたのも、またこの時代のことである（六〇七）。

我が紀元一二六七年、推古天皇の御代

煬帝の豪奢



煬帝の像

煬帝は豪奢を好み、諸處に壯大な離宮を作つたり、江南と河北とを通ずる大運河を開いたりしたので、その爲に民力を疲弊せしめ、大いに人望を失つた。それにも拘らず、帝は更に東に向つて、朝鮮北部の高句麗を討つた。

支那では黃河・揚子江を始め、幾多の大河が東流するので東西の交通・運輸には船を用ひ得るが、南北の交通にはかかる便が少い。從つて煬帝の開いた大運河は、南方の米やその他の物產を、北方に輸送するのに大なる便利を與へたも



揚州附近の大運河の現景　揚州は隋の江都で、煬帝の屢く遊樂した地である。

ので、その後屢〻改修せられたとはいへ、現今でもなほ盛んに利用せられて居る。併し煬帝は運漕の便利のみを考へて、この大事業を成したのではなく、無數の遊船をこの上に浮かべ、沿岸に四十餘の離宮を造り、氣の向くままに諸方に遊幸したのである。驚くべき大規模の贅澤といはねばならぬ。

高句麗・百濟・新羅三國の鼎立

高句麗（或は高麗ともいふ）は前漢の末頃（紀元前三七）、鴨緑江の上流地方に移つた扶餘部族の建てた國で、次第に勢力を朝鮮半島に擴げ、後漢の末頃から三國時代にかけては、漢の占領して居つた地もほぼその領土となつた。これと前後して馬韓から百濟、辰韓から新羅、弁韓から任那が起つたが、任那は半島の南端に位し、勢力も弱小であつたから、我が國に依賴して國を保たうとした。崇神天皇はその請を容れてこれを援けさせられ、その地に日本府を置かせられた。

神功皇后の新羅御征伐

我が仲哀天皇の御代に新羅は熊襲の叛を援けたので、神功皇后は親らこれを征伐し給ひ、百濟をも歸順せしめられた。そこで半島の中部以南は、我が國に歸し、日本府の統治を受けることになつた。

支那文化の東方傳播

支那の文化は早くから朝鮮に傳はつて居たが、漢の武帝の朝鮮經略以來、その傳播は一層盛んとなり、漸次全半島に波及した。新羅・百濟が歸順して、我が國との關係の密接となるにつれ、その文化もまた盛んに我が國へ輸入せられ、大いに我が文化の發達を援けた。佛教の如きも東晉時代に始めて半島に傳來し、欽明天皇の御代に、百濟から更に我が國に傳へたのである。

隋の滅亡

さて隋と高句麗とは國境も接して居つたので、煬帝は諸方を經略した勢に乘じて、これに入朝を促した。然るに高句麗は隋の要求に應じなかつたので、煬帝は三度までもこれを討つたが、遂に成功しなかつた。**そこでかねてから機會**を待つて居つた群雄が諸方に起つて、隋に叛き、中にも太原（山西）の守將であつた李淵は、進んで都の長安を陷れた。

唐の高祖

この時煬帝は出遊して江都（江蘇）に居つたが、臣下の爲に弑せられ、李淵は長安で帝位に即いた（六一八）。これが唐の高祖である。隋

我が紀元一二七八年、推古天皇の御代

は僅に三十八年で亡びた。

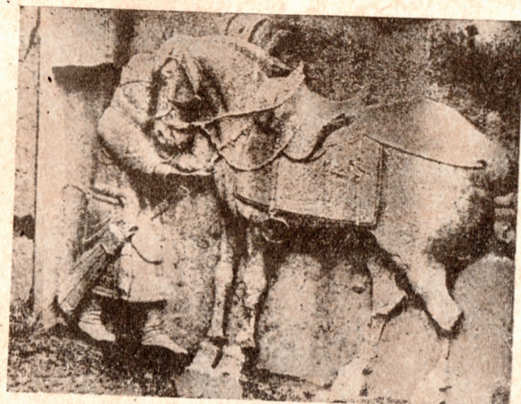
第十二章　唐の初期

太宗及び高宗

高祖の子太宗は古今に稀な英主で、杜如晦・房玄齡・李靖・李勣等、文武の名臣を用ひ、内には律令を定め、善政を布いて、謂はゆる貞觀（太宗の年號）の治を開き、外には諸方を征服して國威を輝かし秦の始皇帝、漢の武帝時代についで、新たに漢民族の對外大發展期を作つた。太宗の子の高宗も、またよく父の遺業をついだので、兩帝約六十年の治世の間、唐の國勢は隆盛を極めた。次にまづこの時代の外國經略の有樣を述


唐の太宗像

貞觀の治


唐の太宗陵前の石像　太宗の陵は陝西省醴泉縣城の北に在る。圖はその享殿に置かれた太宗の愛馬の石像で、唐代初期の彫刻である。

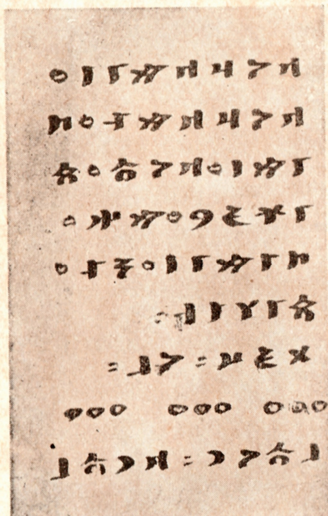
べよう。

突厥の征服

これより前、南北朝の末に突厥（Turk）といふ部族が阿爾泰山の附近から起つて柔然を滅ぼし、東・西の兩部に分れ、遼東からアラル海にかけて勢を振つた。唐の高祖は隋を討つ時に東突厥の援を借りたので、その後、東突厥は唐を侮り、屢〻入寇したが、太宗は遂にこれを討ち滅ぼし（六三〇）、ついで高宗はまた西突厥を滅ぼした（六五七）。

突厥の書籍

突厥では書記の術も發達し、その文字で書いた碑文や書籍などは、なほ今日に殘存して居る。左の圖は近頃敦煌の千佛洞から發見せられた突厥文字の占卜の書で、横に右から左に讀むのである。古來塞外人の用ひた字で今日に知られてゐるものは數種類あるが、突厥文字はその中で最も古い文字である。



朝鮮半島の經略と新羅の強盛

太宗の時朝鮮半島では高句麗と百濟とが連合して新羅を侵したの

百濟・高句麗の滅亡

我が國の百濟救援

で、新羅は唐に援を求めた。そこで太宗は高句麗を親征したが、失敗に終つた。併し高宗の時になつて、また水陸の大軍を發し、まづ百濟を滅ぼし（六六〇）、ついで高句麗を降した（六六八）。我が國は百濟の遺臣の請を容れて、その恢復に力を盡したけれども、成功しなかつた。後、間もなく新羅は、唐が領した百濟・高句麗の舊地を侵し、大同江以南はすべて新羅の領土となつた。



大唐平百濟碑塔　朝鮮忠淸南道扶餘郡の南に在る。

西域・吐蕃の經略

太宗は西域の經略にも從ひ、高昌を征伐したのを始め、焉耆（今の喀喇沙爾）・龜茲（今の庫車）・于闐（今の和闐）等を從へ、また吐蕃（今の西藏）とは婚を通じて和親した。



唐代西域圖

屬地の管轄

六都護府

上に述べた以外にも、なほ今の印度支那の地方及び南海諸國からも朝貢し、唐の屬地は甚だ廣大となつた。そこで唐では、これ等の屬地を管轄する爲に六つの都護府を置いた。これを表で示すと、次の通りである。

都護府名稱	所在地	所轄地域
安東	初め平壤、後、遼東城	滿洲・朝鮮
安北	初め都斤山（外蒙古）、後、陰山の麓	外蒙古
單于	雲中城（山西省大同縣の西北）	內蒙古
北庭	庭州（新疆省迪化縣の東）	天山北路
安西	初め高昌、後、龜茲（新疆省庫車縣）	天山南路・西トルキスタン
安南	交州（佛領東京の河內）	南方諸國

交通・貿易の發達

かくの如く唐の國運の榮えたのにつれて、海陸ともに諸外國との交通が盛んになり、貿易も大いに發達した。當時大食國（Tadji）と稱せられた亞剌比亞國商人の如きも、海路から廣州（廣東）・泉州（福建）・杭州（浙江）・揚州（江蘇）等

大食國

に來て、貿易に從事するものが多かつた。

唐の初め頃、亞剌比亞では摩訶末(Muhammed)がイスラム教(Islam)といふ一神教を開いて次第に勢を得、遂に國內を統一してサラセン(Saracen)帝國を建てた。大食國といふのは即ちこれである。イスラム教徒は異教徒を討滅ぼすことを宗教上の義務としたので、頻りに諸方を征伐した。當時波斯には支那の三國時代(二二六)に起つた薩珊(Sassan)王朝が君臨してゐたが、遂にまた大食の爲に滅ぼされた(六四二頃)。高宗の時に、もとの波斯の王族は遠く唐に來て保護を求め本國を恢復しようとしたが、目的を達しなかつた。大食國が始めて唐に好を通じたのも、高宗の時(六五五)である。


大食の商船

第十三章　唐の中期及び末期

則天武后

高宗は皇后の武氏を寵愛し、晩年には政治も大概皇后に委ねた。

玄宗

高宗についでその子中宗が立つたが、皇后はこれを廢してその弟の睿宗を立て、間もなく睿宗をも廢して、自ら帝位に上り、國を周と號した(六九〇)。これが則天武后である。併しこの後僅に十五年を經た時に、宰相張柬之等は武后に迫つて中宗を位に復せしめ唐を再興した(七〇五)。

中宗の後、睿宗を經て玄宗が位に即いた。玄宗は勤儉主義で國政を治め、外に向つては、要害の地十箇處に節度使を置き、警備を固めたので、內外よく治まり、文運隆盛を極めた。謂はゆる開元(玄宗の年號)の治である。

開元の治


驪山の溫泉　陝西省臨潼縣に在る。唐代華清宮の所在地で、屡〻玄宗の遊幸した所である。

併しながら玄宗も、その晩年には政を怠り、楊貴妃の愛に溺れ、遊樂に耽つたので、綱紀大いに紊亂した。加ふるに、打續く太平に、武事は全く卑しまれ、武將には多く外人を任用する有樣であつたから、國防

安史の亂

も全く弛廢した。この頃安祿山（アンロクザン）は玄宗の寵遇を受けて、平盧（内蒙古東部）・范陽（河北北平）・河東（山西太原）の三節度使を兼ねて居つたが、かかる形勢に乘じて范陽に叛旗を擧げ（七五五）、長安に迫つた。そこで帝は蜀（四川）に出奔し、その子肅宗に位を讓つて挽回を計らせた。安祿山は長安に入つたが、間もなくその子に殺され、賊將史思明（シシメイ）が代つて軍を統べた。唐では郭子儀（クワクシギ）・李光弼（リクワウヒツ）等が勤王の軍を率ゐ、突厥について漠北を統一した回紇（ウイグル）（Uigur族）及び西域諸國の援を借り、肅宗の子代宗の時になつて、始めて賊を平げることが出來た（七六三）。この叛亂は凡そ八年間續き、唐はこれが爲に大いに疲弊し、急に國運が衰退した。


楊貴妃の墓　陝西省興平縣に在る。

安祿山は西域人の血統に屬し、營州（今の朝陽）から出た人である。彼が叛旗を翻して范陽から洛陽に向ふと、遠近諸方はその威風に恐れて忽ち瓦解

睢陽城の堅守

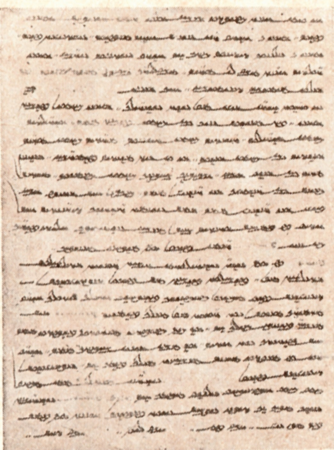
した。玄宗はこれを聞いて、河北地方には一人の義士も無いのかと歎息した。そのうち、顔眞卿（ガンシンケイ）が平原（山東）に、顔杲卿（ガンカウケイ）が常山（河北）に、張巡・許遠が睢陽（スヰヤウ）（河南）に據つて賊を討ち、僅に官軍の氣勢を揚げた。中でも睢陽の籠城は忠勇義烈を極めたもので、城中に糧食が盡きてからは馬を食つて戰ひ、馬が盡きると雀や鼠を食ひ、それも盡きては婦人老幼を食つてまでも防戰し、初め一萬の軍が僅に四百人となつても、賊に降るものは無かつた。かくまで堅守したが援軍は來らず、將士は病んで戰ふを得ず、城は遂に陷つて、張巡も許遠も賊の爲に殺された。

外難
回紇の横暴

安史の亂を平げるについては回紇の功が多かつたので、この後、回紇は唐に對して横暴を極め、大いに唐を苦しめた。

吐蕃の侵寇

吐蕃も屢、唐の西北や西域地方を侵し、代宗の時には一時長安をも占領した（七六三）。


回紇の佛典　突厥文と同様に、右から左に讀むのである。

朝政の紊亂
節度使の增置

かく唐は内外の國難に苦しんだ上に、安祿山の亂以來、内地の諸方にも節

宦官の横暴

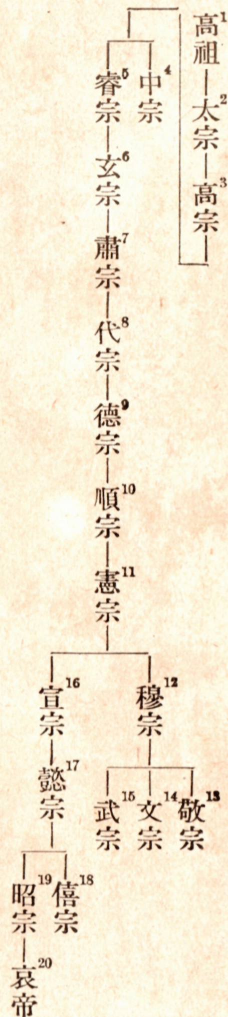
度使を置き、軍事の外に財政の權をも委ねたので、節度使の數は增し、勢は强大となり、朝威は愈〻衰へた。その上に宦官の勢力も盛んとなり、憲宗(代宗の曾孫)以後は意のままに天子を廢立し、朝政全く紊亂した。かかる有樣で、唐は玄宗の後なほ凡そ百五十年間ばかり續いたけれども、その勢は遂に振はなかつた。

唐の滅亡

憲宗の曾孫昭宗は宦官の跋扈を惡み、汴(河南開封縣)の節度使朱全忠と謀つて、悉くこれを誅滅したが、朱全忠はこれから權勢を得、遂に帝を弑して唐を滅ぼし(九〇七)開封(もとの汴)に都して國を後梁と號した。唐は高祖の建國以來二百九十年を經て滅亡した。

後梁

我が紀元一五六七年、醍醐天皇の御代



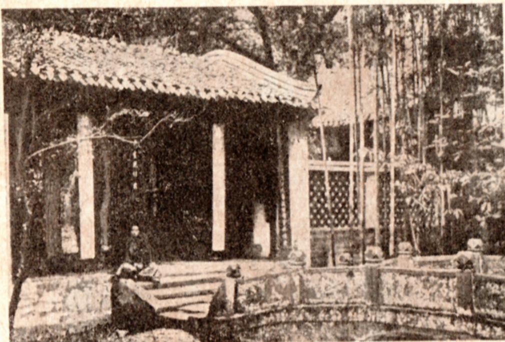
第十四章　唐代の文化・制度

唐代文化の特色と傳播

唐代には支那固有の文化は成熟の時期に入つたが、交通の發達につれて、西方諸國の學術・宗教・美術等も唐に輸入せられたので、ここに內外を混一した特色のある文化の發生を見ることになつた。さうしてその燦然たる文化は、ただに國內に輝いたばかりでなく、朝鮮や我が國を始め、廣く東方諸國にも傳へられ、それぞれその地の文化の開發に大なる影響を及ぼした。

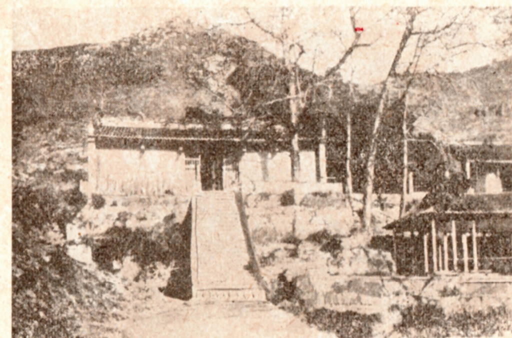
文學

かくの如く唐代には一般に支那の文化は發達進步したが、中にも文學は隆盛を極め、詩文が世人に重んぜられると共に名家も輩出し、玄宗時代には李白(太白)・杜甫(子美)、少しく後れて憲宗時代には韓愈(退之)・柳宗元(子厚)・白居易(樂天)等が出た。


杜甫の廟(四川省成都縣に在る。)


唐代畫樹下人物圖

美術・工藝


韓愈の廟　廣東省潮安縣に在る。

美術・工藝の進歩もまた著しく、優れた藝術家が多く現はれた。書道では歐陽詢・褚遂良等は唐初に、顔眞卿は玄宗時代に出で、繪畫では玄宗時代に呉道玄及び王維（南宗畫の祖）・李思訓（北宗畫の祖）等が出た。印刷術が漸く行はれるやうになつたのも、またこの時代からのことである。

道教及び佛教

唐では歴代の天子が大概道教を尊崇し、武宗の如きは道教以外の諸宗を禁絶するまでに至つたので、この教は廣く世に行はれた。併し佛教もまた盛んで、印度・西域地方から多くの名僧が來て法を說き、唐からも

大唐太宗文皇帝製三藏聖教序蓋聞二儀有象顯覆載以含生四時無形

褚遂良の書

玄奘・義淨

太宗時代には玄奘、則天武后

唐代印刷の佛典
敦煌の千佛洞から發見せられたもので、唐懿宗の咸通九年(八六八)の印刷である。

玄奘の事蹟

王維の畫

の頃には義淨が印度に旅行し、諸種の經文を持歸つて翻譯し、熱心に布教に從事した。その結果、諸宗教並び昌え、寺院は到る處に建てられ、支那佛教の最盛時期を出現した。

玄奘はその旅行に十六年を費した。彼はこの長い月日の間諸方に佛教の遺蹟を探り、經典を搜し求め、または有名の學者を訪れなどして佛教の研究に身を委ねた。唐に歸つてから後は、その正確な知識で、熱心に經典の翻譯に從ひ、これまで意味の曖昧であつたところを明らかにしたり、誤つて居たところを正したりして、謂はゆる新譯を施した。古來多くの譯經家の中に於て、



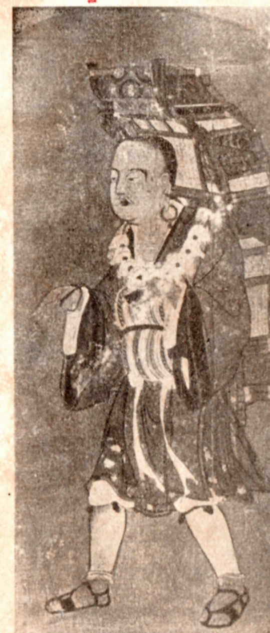


唐代畫　樹下人物圖

この畫は唐代の高昌(今の新疆省哈喇和卓)の遺蹟から出たもので、裏に玄宗の開元四年(西紀七一六)の戸籍が張られてある。從つてほぼその頃に描かれたものであると疑ない。唐代風俗の一面を知るのによい材料である。

唐代の壁畫





玄奘旅行の圖

玄奘は特に傑出した人として知られて居る。かの有名な大唐西域記は、その旅行中の見聞を記したもので、當時の西域・印度の地理・風俗を知るについて、最も重要な書物である。

西方諸宗教の東漸

祆教

なほ唐代には、西域地方に流行した祆（ケン）教・景教・摩尼（ニ）教等の諸宗教も傳はつて、一部の人々の間に行はれた。祆教は紀元前七世紀の頃、波斯のザラッストラ(Zarathustra)（蘇魯支）が開いた拜火教、景

景教



大秦景教流行中國碑　明の末に長安縣城附近の地中から發掘したものである。



摩尼教寺院の壁畫　高昌の摩尼寺の廢墟に存したもので、前方の大像は摩尼、後方はその信徒である。

この畫は唐代の高昌附近、今のムルックといふ地に近きベゼクリク洞窟寺より得られたる壁畫にして、上方に書かれたる題銘によりて考ふれば、唐代に描かれたるものなるべしといふ。中央の佛像の右足に近く跪坐合掌せる小像は、この畫を寄進したる人なり。右側上隅に對立せる二僧の像は、互に著しくその相貌を異にせるが、右側は西域の城廓諸國に住みし人種、左側はその遊牧人種の容貌を象りたるものなるべしといはる。西域佛教美術の一標本なり。今、獨逸伯林の博物館に藏せらる。

摩尼教

イスラム教

教は紀元五世紀にシリヤのネストリウス(Nestrius)の唱へた基督教の一派、摩尼教は紀元三世紀に波斯の摩尼(Mani)が始めた教である。イスラム教も、唐に來て居つた大食人の間に行はれた。



懐聖寺の光塔 廣東省南海縣に在る。唐代に大食人の建てたイスラム教の寺院であるといふ。

更に唐代の文化に關して特に知つて置かねばならぬのはその制度である。唐の制度は、以前の諸朝で行つたところを取捨し、大概太宗の時に定められたのであるが、歷代の制度中最も完備したものとして、長く後世の模範となり、我が國や朝鮮でもこれに倣つた。

官制

まづその官制を見ると、中央政府には天子の詔の草案を作る中書省と、その草案の可否を議する門下省と、門下省を經た詔を實施する尙書省とがあり、尙書省の下に、吏(官吏の任免)・戶(租稅)・禮(禮儀教育)・兵(軍事)・刑(刑獄)・工(工藝)の六部を置いて、それぞれ政務を掌らせた。謂はゆる三省六部の制度

である。地方は十道に分け、道の下に州、州の下に縣を置き、各、長官があつて、その地方の行政を掌つた。

田制と税制

田制は均田制といつて、土地を公有とし、年齢・男女等の區別によつて各、均一の田地を與へ、その收穫から一定の粟を納めさせた。即ち租である。租の外にも、調といつて絹や布など各、鄕土の産物を納めさせ、また庸といつて、一年に二十日間、公の力役につかせた。

兵制

兵制は徴兵制度で、一般國民から壯丁を徴集し、農業の忙しくない冬季に於て武事を練習せしめ、また交替して京師の守備に當らしめた。

學制と官吏任用法

學制は京師に國子學・大學・四門學、地方に州學・縣學等の學校が置かれ、學生は身分に應じて、それぞれこれ等の學校に入學した。この學制に關聯して、官吏任用の法も定められた。既に隋の時から六朝時代の法を改め、試驗によつて官吏を任用する方針を採つたので、唐もこれに倣ひ、これ等の學校出身者を政府で試驗して、その及第者を採用することに定め、人材進出の途を開いた。

諸制の更改

これ等の諸制の中、田制や税制は唐の中頃から全く變じ、田地は私有となつて自由に賣買せられ、從つて租税は財産の多少に應じて賦課せられることになり、兵制も徴兵制度が廢れて傭兵制度を採らねばならぬことになつた。

唐と我が國

唐代には、太宗の時、我が舒明天皇が犬上御田鍬を使として修交せしめられたのを始めとして、我が遣唐使・留學生は唐の衰亡に近い宇多天皇の御代まで絶えず派遣せられた。これと共に最澄・空海を始め求法の爲入唐する僧侶も少くなかつたから、唐の文物は盛んに我が國に輸入せられた。

唐文化の日本化

併し我が國では、これをその儘取入れたのではなく、すべて日本精神に調和せしめ、我が國特殊の文化の發達に役立てたのであつたことは、特に注意しなければならぬことである。

唐の社會

隋唐時代になつて、從來長く行はれた門閥尊重の風は次第に衰へ、才能あるものに出世の途の開かれるやうになつたことは前にも述

我が紀元一五八六年頃醍醐天皇の御代

契丹の繪畫と文字　遼の帝陵から近頃發見せられた壁畫の一部及び銘文の文字である。

契丹（遼）と宋

宋の太宗像



起し、内外蒙古を從へ、ついで滿洲の渤海國を滅ぼした（九二六頃）。　渤海國は唐の半頃（七一三）に大祚（ダイソ）榮（エイ）といふものが松花江流域の靺鞨（マツカツ）部族を從へて建てた國で、忽汗（コツカン）城（今の吉林東京城）を都とし、唐と交通してその文化を傳へ、また我が國とも互に往來し、一時國勢盛んであつたが、ここに至つて滅亡した。

その後契丹はまた後晉を滅ぼして北方支那の一部をも占め、國を遼と號して勢を振ひ、宋の一統後は、これ等の兩國が相接して南北に對立することになつた。　宋の太宗は遼の聖宗（太宗の後四代目）が幼年で即位（九八二）した機會に乘じ、進んで遼を討つたが却つて失



我が紀元一五九六年、朱雀天皇の御代

高麗と遼

高麗太祖の陵

敗に了り、その子の眞宗の時には、遼の聖宗は大擧して宋を侵した。　眞宗はこれを澶（セン）州（河北）に破つたが（一〇〇四）、それにも拘らず、國内に非戰論が盛んであつた爲、年々多額の銀や絹を遼に贈ることにして、和を結んだ。

朝鮮半島では、その後新羅の勢が漸く衰へたのに乘じ、五代後梁の時に、王建は松嶽（京畿道開城府）に據つて高麗國を建て、後、遂に新羅を滅ぼした（九三六）。　これが高麗の太祖である。

高麗は遼と境を接しながら、却つて好を宋に通じたので、遼の聖宗はこれを討伐した。　然るに宋はこの時高麗を援けなかつたから、以後高麗は宋と絶つて、遼に屬することになつた（九九四）。

かかる有様で、遼は聖宗の時に極盛時代に達し、その領土は西は天山、東は日本海に達し、遠近大小諸國の來り通ずるものの六十餘にも及



我が紀元一六九八年、後朱雀天皇の御代

支那をキタイと呼ぶ理由

んだ。

當時遼の勢はかくの如く盛んであつたから、契丹即ちキタイといふ名は遠く西方諸國に知られた。今でもトルコ語や露西亞語などでは、支那を指してキタイといふが、これは當時北方支那の一部をも領した契丹の名を傳へて居るのである。

宋と西夏



西夏の繪畫　甘肅省の北方に當る西夏の遺蹟黑城から發掘せられたものである。

宋では眞宗についで、その子仁宗が位に即いた。この時代には韓琦(カンキ)・范仲淹(ハンチユウエン)・歐陽修・司馬光等を始め、多くの名士人材が輩出したが、外國との關係は益〻多難となり、更に新興の西夏との間にも事を生じた。西夏は黨項(タングート)部族(チベット族)の李元昊(カウ)が建てた(一〇三八)國で、興慶(甘肅)に都し、今の陝西省から甘肅省地方を領有し、屢〻宋の西北邊を侵した。宋は防戰に苦しみ、毎年銀絹を與へる約束で和を結んだ(一〇四四)。

宋初の政策と神宗の改革

かくの如く宋は外に對して屈辱を重ね、國力が振はなかつたので、仁宗の後一代を經て位に即いた神宗は、熱心に富國强兵の策を講じ、

王安石の新法

王安石の意見によつて、青苗法を始め諸種の新法を行つた。併しこれ等の新法に對しては、反對者が少くなく、中にも歐陽修・司馬光等は、新法が人民を苦しめるものであることを痛論し、舊法を維持しようとした。

法黨の爭

そこで當時の政界に、新法黨と舊法黨との兩派が生じ、以後神宗の子哲宗及び徽宗の代にかけて三十餘年の間、兩黨の間に劇しい爭が行はれた。然るに徽宗は風流奢侈に耽つて、政治に力を用ひなかつたので、宋の國運は一層振はなかつた。



神宗の像

王安石

王安石の行つた青苗法といふのは、春、苗を植ゑる時に政府から農民に錢を貸し、秋、收穫の時に利を付けて返させる法で、その他の新法と共に、政

我が紀元一七七五年、鳥羽天皇の御代

府にも人民にも便利な法であつたが、その實行に當つて種種の弊害が起り、人民を苦しめることになつた。併し王安石は非常に自信の強い人で、新法を行ふ爲には世間の非難を顧みず、恩人や友人を排斥することすら憚らなかつた。王安石は政治家としてのみならず、文章家としてもまた有名の人である。





王安石の像とその書

金の興起

宋の徽宗が風流に耽つて居る頃、北方にまた一個の勢力が現れた。即ち女眞(ヂヨシン)部の活動である。女眞は滿洲黑龍江の流域に據つた靺鞨の一部で、遼に屬して居つたが、阿骨打(アクダ)がその部長となつてから勢盛んになり、皇帝と稱して會寧(哈爾賓の東南)に都し、國を金と號した(一一一五)。これが金の太祖である。遼の天祚帝(聖宗の玄孫)は親ら金を征伐したが、却つて大敗し、金軍は南下して遼に迫つた。

我が紀元一七八五年、崇德天皇の御代

遼の滅亡

遼の敗北を聞いた宋は金と同盟して、南北から遼を挾撃した。然るに宋軍は屢、遼の爲に破られ、進むことが出來なかつたので、金は獨力で遼を破り、太祖の子太宗の時に、遂にこれを滅ぼした(一一二五)。この時遼の皇族耶律大石(ヤリツタイセキ)は西方に逃れ、後に中央亞細亞に據つて西遼國を建てた(一一三二頃)。



宋・遼・金・西夏形勢圖

令文岳
聖旨
阿矢卜魯首
方炙月
萬壽
土滿塞革

漢語・女眞語の對譯

第一行と第二行とは兩語の對譯、第三行は第一行の女眞字の發音を漢字で書いたのである。次の三行もまた同じ。

宋の南遷

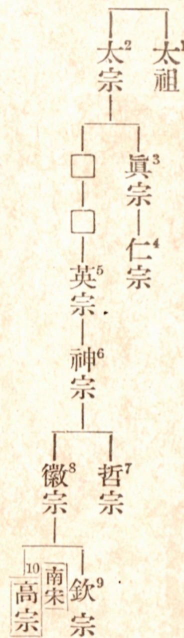
この後間もなく金の太宗は大軍を率ゐて南下し、宋を侵した。徽宗は位をその子欽宗に讓り、勤王の兵を募つて防戰せしめたが、當時宋では一般に士氣が振はなかつたので、金は容易に開封の都を陷れ(一

我が紀元一七九八年、崇德天皇の御代

靖康の難

七）、徽宗・欽宗を始め、多くの皇族・大官を擒にして北に歸つた。謂はゆる靖康（欽宗の年號）の難である。金軍の去つた後、欽宗の弟高宗が位に卽いたが、金の勢を恐れて南に遷り、臨安（浙江省杭縣）に都した（一一三八）。それで高宗以前を北宋、以後を南宋時代といふのである。

北宋諸帝略系



宋の士氣の弛廢

當時宋の廷臣等が君國を念ふことの薄かつた有樣は、欽宗が金の陣營に行つて降り、天子の號を奪はれて默然として居つた時に、扈從の大官等はただ和議の成立したことのみを喜び、役所に歸つて宴會を開き、終日談笑して過ごしたといふことによつても知ることが出來る。敵の金人も流石にかかる有樣には驚いて、遼の亡びる時には義の爲に死んだものが

十數人もあつたのに、宋では僅に李若水（ジャクスヰ）一人あるのみだと嘲つた。李若水は徽宗・欽宗に從つて敵陣に行つたが、臣節を守つて屈せず、最後まで金人を罵つて殺された人である。

第十六章　南宋

秦檜の和議

宋では南遷の後、國論が主戰と講和との二派に分れ、學者や軍人等の間には、金を討伐することを主張するものが多かつた。中にも名將岳飛（ガクヒ）は、金軍を迎へ撃つて大いにこれを破つたが、秦檜（シンクワイ）は頻りに和議を唱へ、岳飛を殺し、學者の反對論を抑へ、遂に金に歲貢を納め、臣と稱することを約して、和を結んだ（一一四一）。

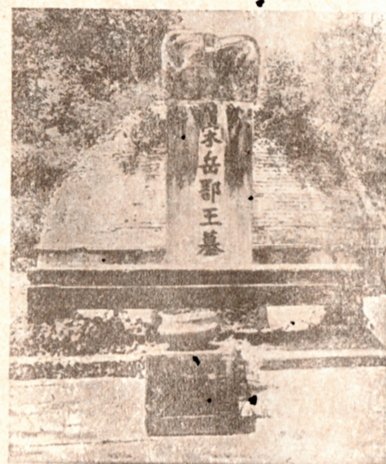
岳飛

岳飛は忠勇無雙の名將で、その用兵の巧みであつたことは、金軍で、岳飛の軍を動搖させるのは、山を撼（ウゴ）かすよりも困難だといつたことによつても知ることが出來る。それで金は深く岳飛を恐れ、これを除きたいと考へ、秦檜が頻りに和を請ふのに對して、まづ岳飛を殺せ、その後で和議を進めようと返事した。秦檜は遂に冤罪を被らせて岳飛を獄に下し、詰問し

金の世宗と宋の孝宗

た。その時、岳飛は衣を裂いて背を示したところ「盡忠報國」の四字が深く入墨せられてあつた。この四字こそは實に岳飛の志であつた。或人が天下は何時太平になるだらうかと聞いた時に、岳飛は「文臣不愛錢、武臣不惜死、天下太平矣」といつたのも、その心がけと、當時の世の有様に對する憤とをいひ表したものである。殺された時、年三十九であつた。


孝宗の像



岳飛の墓　浙江省杭縣城の西に在る。

その後、金は都を燕京(今の北平)に遷し、また宋と戰つたが、明君の世宗(一一六一—一一八九)が立つに及んで宋と和睦し、大いに力を民治に用ひ、殊に女眞人が支那文化に感化せられて、文弱に流れるのを戒め質朴の

國風を保持することに力めた。世宗の時代には、宋では孝宗が位に在つた。孝宗も南宋諸帝中の賢君で、また政治に勉めたので、支那はここに三十餘年間の平和を得た。併しこの後は宋金ともに國勢振はなかつたが、この頃漠北に蒙古が起つて、金の背後に迫つて來た。

宋代文化の發達　儒學及び文學

宋代には文化は一般に進歩し、學問・宗教・美術・工藝など、みな著しい發達を遂げた。特に儒學はこの時代に面目を一新し、漢代以來引續いて行はれた訓詁學よりも、儒學の根本に立入つて、宇宙の原理や人の性の研究を重んずることになつた。

程朱の學

宋代のこの學風は仁宗時代の周敦頤(茂叔)が開き、程顥(明道)・程頤(伊川)が受繼ぎ、南宋の朱熹(晦庵)に至つて大成した。それでこれを性理の學、義理の學、または程朱の學などと稱するのである。文學に於ては詩は唐に及ばなかつたが、文章は却つてこれを凌ぎ、歐陽修・蘇軾(東坡)等を始め、多くの大家


周敦頤の像

が輩出した。

宗教

宗教は佛教と道教とが流行した。佛教の中でも禪宗が最も盛んで、宋學や道教の一派である全眞教の興起に、少からぬ影響を及ぼした。


徽宗の像

藝術

この時代には知名の畫家が多く出たが、その中、北宋の李公麟(龍眠)、南宋の夏珪等が最も有名である。徽宗は美術を好み、自ら畫の名手であつたのみならず、畫院を置いて保護奬勵を加へたので、これ以來繪畫の發達は殊に著しかつた。陶磁器を始め、諸種の工藝品の製作もまた徽宗の時代に大いに進


徽宗の畫



(上)　夏珪の山水
(下)　蘇軾の書

歩し、宣和（徽宗年號）の時代の名を殘すに至つた。

印刷術

なほ印刷術は、特に宋代から盛んになり、その初に既に佛教の一切經の出版が行はれ、その他諸種の書籍も續々出版せられた。　かくの如く印刷が盛んに行はれた結果、一般に書籍を得ることが容易になり、從つて大いに文化の發達を助けた。

宋代の陶器



貿易の發達

宋代にも唐代に引續いて海路による交通・貿易が益〻發達し、西方からは主として大食の商人が廣州・泉州・杭州等に來り、宋からも印度や南洋諸國に出かける商人が少くなかつた。　當時輸入では香料・藥品・象牙等、輸出では絹・銅・陶器等が主要の品であつた。　宋ではこれ等の輸入品の或種類を政府の專賣とし、或は貿易に稅を課しなどして、國庫の收入を計

宋代の社會

つた。この頃塞外人の間に茶を飲む風が流行して來たので、宋の茶は盛んに北方に輸出せられ、北方からは主として馬が輸入せられた。

唐の末から貴族の勢は愈〻衰へ、また武人の跋扈も宋初から熄（ヤ）んだので、ここに一般庶民は自由にその志を伸ばすことが出來るやうになつた。この時代に於て、商工業は益〻進歩し、貨幣を使用して賣買することが普通となり、商品の集散する都市が諸方に昌えた。從つて世人の生活程度も高まり、社會は凡ゆる方面に於て著しく進歩した。

貨幣・紙幣の流通




唐・宋時代の錢

右の開元通寶は唐初、左の政和通寶は宋の徽宗時代の鑄造。

唐代に於ても、通貨は主として布帛が用ひられ、錢はその補助として使用せられる有様であつたが、宋代には錢が主として流通することになつた。併し錢は重く携帶に不便なので、宋では交子（カウシ）といふ兌換紙幣をも發行して、錢と併せて用ひることにした。かかる紙幣の行はれるやうになつたのは、いふまでもなく、宋代の經濟事情の進歩發達したことを證するものに外ならぬ。

宋代文化の我が國への影響

日・宋貿易

宋と我が國との間には、隋唐時代に於ける如き公の國交は無かつたが、彼我商人の私に交通貿易することは絶えず行はれ、宋の絹織物・香・藥等は我が國に輸入せられ、我が硫黄・板材等は宋に輸出せられた。これに伴つて我が僧侶の入宋してその文化を傳へたものもあつた。

禪宗及び茶の傳來

榮西やその弟子の道元が宋に遊んで禪宗を傳へ、鎌倉時代の社會に大なる影響を及ぼした如きはこれである。榮西が宋から茶を持歸り、我が國に於ける喫茶の風俗の基を開いたことも、注意しなければならぬ。

第十七章　元　（その一）

蒙古の勃興

蒙古は今の外蒙古斡難（オノン）河の上流地方に據つた遊牧民で、遼・金に屬したが、金の世宗の時に鐵木眞（テムジン）(Temujin)が出て次第に勢力を得、遂に内・外蒙古の諸部族を一統してその君主となり、成吉思汗（ジンギスカン）(Chingiskhan)（汗は君主の義）と號した（一二〇六）。

我が紀元一八六六年、土御門天皇の御代

元の太祖といふのはこの人である。

成吉思汗の功業

その後成吉思汗は西夏を降し、ついで金を討つてほぼ黄河以北の地を取つた。この頃阿爾泰山附近の乃蠻(Naiman)部は、成吉思汗に破られて西に逃れ、中央亞細亞の西遼國を奪つてその地に據つたので、成吉思汗は軍を遣はしてこれを平げ、ついで自ら乃蠻の西隣の花剌子模(Khorazm)國を征服した。この時その別軍は波斯を過ぎ、今の露西亞の東南部まで侵入した。成吉思汗はこの西征から歸ると、間もなくまた西夏を討つてこれを滅ぼし、更に金を討たうとしたが、その中途で死んだ（一二二七）。



成吉思汗の像

成吉思汗の境涯

成吉思汗の幼時の蒙古部は、微々たる一小部に過ぎなかつた。當時外蒙古地方には統一者なく、



蒙古人の張幕

我の紀元一八九四年、四條天皇の御代

各部互に掠奪併呑を事として居つたので、彼が僅か九歳或は十三歳ともいふ)の時、その父は他の部民の爲に毒殺せられた。この後の彼の境遇は實に慘憺たる有樣で屢〻敵に襲はれ、九死に一生を得たことも度々であつた。その一統を成就して、成吉思汗と稱したのが、五十三歳の時であつたことから考へても彼が初めから幸運に惠まれた人でなかつたことを知り得るであらう。彼の天性優れて居つた用兵術は、この間の習練を經て愈〻熟達し、その後諸國の征伐に於ては、殆ど敗れたことは無かつた。彼はその七十四歳の生涯を大概戰鬪に過したが、しかもまた政治的手腕もあつて從へた土地には適當の人を用ひて支配せしめ、藝能あるものは、どこの國の人でもそれぞれ任用した。その子弟に回紇文字を習はせ、始めてこの文字で蒙古語を書き表すやうにしたのも、彼の功績である。ただ戰ふことだけを知つた征服者ではなかつたのである。

金の滅亡

成吉思汗についでその子窩闊台(Ogotai)が立ち、喀喇和林(Karakorum)（外蒙古オルホン河畔）に都を奠めた。これが太宗である。太宗は南宋と同盟を結び、南北から金を挾擊して、遂にこれを滅ぼした（一二三四）。

拔都の西征

その後太宗は拔都(Batu)（太宗の甥）に命じ、大軍を率ゐて西征せしめた（一二三六）。拔都は露西亞に攻入つて、モスクヴァ(Moskva)・キエフ(Kiev)等を屠り、更に波蘭（ポーランド）及び匈牙利に侵入し、歐洲諸國を震駭させたが、太宗が死んだので、軍を引上げた（一二四一）。



太宗即位の圖　波斯人の畫で、前に跪いて盃を捧げて居るは太宗の弟拖雷（ツルイ）である。

旭烈兀の西征

太宗の後、その子定宗が立つたが間もなく死し、ついで從弟の憲宗が立つた。憲宗もまた弟の旭烈兀（フラグ）(Hulagu)に命じて、西方亞細亞を征伐させた。旭烈兀は波斯を平定し、進んでシリヤ(Syria)・亞剌比亞を征伐したが、會々憲宗が死んだ（一二五九）ので軍をかへした。



蒙古の戰士

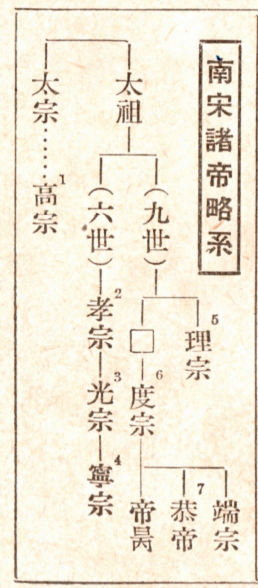
宋の滅亡

憲宗は弟の忽必烈（クビライ）(Kubilai)に雲南・吐蕃等の地方を平定させ、ついで忽必烈と共に宋に侵入したが、その中途で死し、忽必烈が位を嗣いだ（一二六〇）。これが世祖である。世祖は燕京（今の北平）に都を定めて大都と稱し、始めて元といふ國號を建て（一二七一）、ついで軍を出して宋を討つた。宋では文天祥・張世傑等が防戰に力めたが、遂に元の爲に滅ぼされた（一二七六）。古來外民族で支那の全土を一統したのは、實に元の世祖が始めである。宋は太祖の建國以來ここに至るまで、三百十七年を經た。

我が紀元一九三六年、後宇多天皇の御代



世祖の像



南宋諸帝略系

第十八章　元（その二）

世祖の東方侵略　高麗の服屬

これよりさき太宗の時に、高麗は一旦蒙古に從つたけれども、その後叛服定まらなかつたが、世祖は更にこれを服屬させ、皇女を高麗王

文永・弘安の元寇

に娶はせてその關係を固めた。これが先例となつて、この後、高麗は代々王妃を元から迎へることになつた。世祖は更に進んで、我が國をも侵略しようとし、前後二回來寇した（一二七四—文永十一年、一二八一—弘安四年）が、我が國ではこの前古未曾有の國難に當り、上下一致し、大いに國民的自覺と敵愾心とを振起し、よく大敵を擊ち退けて國威を發揚した。

元軍來寇の圖　元寇役の勇士竹崎季長が時の畫家に實況を語つて畫かせたものである。

世祖の南方侵略

南方に向つても、世祖は緬(マ)・交趾・爪哇(ジャヴァ)(Java)等の諸國を征伐し、別に使を遣はして、スマトラ(Sumatra)・南印度の諸國をも入貢せしめた。

蒙古の版圖

かくの如く、蒙古は成吉思汗から世祖の時代にかけて、絕えず諸方を征伐し、遂に亞細亞大陸の一半と歐羅巴大陸の東部とを領有した。これ等の領土には、既に成吉思汗の時から諸子・諸將を分封したが、その中、四汗國が最も

四汗國

强大であつた。四汗國とは察合台(チャガタイ)汗國(Chagataikhan)（始祖は太祖の第二子察合台、西遼の故地）・窩闊台(オゴタイ)汗國(Ogotaikhan)（始祖は太祖の第三子窩闊台、阿爾泰山の西に當る地方）・欽察(キプチャク)汗國(Kipchakkhan)（始祖は拔都、西部西比利亞及び東歐羅巴の地方）・伊兒(イル)汗國(Ilkhan)（始祖は旭烈兀、西方亞細亞地方）の四國である。

海都の亂

さて、さきに太宗の子の定宗についで從弟の憲宗が立つたので、太宗の一族は深くこれを恨み、世祖の卽位をも承認しなかつた。世祖が位に卽いて間もなく、太宗の孫海都(ハイヅ)(Haidu)は遂に世祖に叛いて兵を擧げ（一二六八）、察合台・欽察の兩汗國と同盟を結び、屢〻喀喇和林に迫つた。世祖はこの亂の平定に苦心したが、志を達しないで死し、次の成宗の時に始めてこれを平げることが出來た（一三〇一）。海都の亂が起つてから、蒙古の諸汗國は殆ど獨立の姿となり、一統の事業は瓦解に歸した。

元の失政

元は世祖以來引續く戰爭の爲に國用が多かつた上に、吐蕃の喇

居庸關の現景　關は北平の北方凡そ十七里の處に在る。世祖が喇嘛供養の爲に修築したものである。

元の交鈔

嘛教（一佛教の派）を極端に崇拜して、佛事の爲に莫大の費用を濫費し、財政甚だ困難となつた。そこで頻りに租税を增し、また多額の交鈔（紙幣）を發行して、これを救はうとしたので、人民は重い負擔と物價の騰貴に苦しめられた。

元代の社會

その上、元の社會では、蒙古人が甚だしく跋扈し、漢族はその下に在つて虐待を被り、常に不平を懷いて居つた。

元の社會では漢族は大いに虐待せられた。例へば彼等は蒙古人に毆られても、毆り返すことを禁ぜられた。人を殺したものは死罪に行はれるのが常法であつたが、蒙古人は漢族を殺しても、その爲に死刑を受けることは無かつた。上級の役所の長官には、大概蒙古人か西域人（當時色目（シキモク）人といつた）が任ぜられ、漢族は才能があつてもその下役人以上に用ひられないのが普通であつた。從つてこの時代の漢族の中には、蒙古人と僞り稱して出世を企てるものもあつた。征服者と被征服者との間柄とはいへ、少からざる虐待といはねばならぬ。

我が紀元二〇二八年、後村上天皇の御代

元の滅亡

然るに順帝（世祖の後十一代目）はかかる事情を顧みず、一層喇嘛教に心醉し、失政を重ねたから、漢族は遂に諸方に起つて叛亂した。その中、金陵（今の南京）に據つた朱元璋（シユゲンシヤウ）の勢が最も强く、次第に揚子江の南北を併せ、皇帝の位に即いた（二〇二八年）。これが明の太祖（洪武帝）である。やがて明軍は大都に攻入り、順帝を蒙古に逐うて元を滅ぼした（同年）。元は世祖の建國から九十八年を經て滅亡した。

元室諸帝略系

- 鐵木眞（太祖）I
  - 朮赤（ヂユチ）—拔都
  - 察合台
  - 窩闊台（太宗）II
    - 貴由（クユク）（定宗）III
    - □—海都
  - 拖雷
    - 蒙哥（モンガ）（憲宗）IV
    - 忽必烈（世祖）1—□
      - □—泰定帝 6—天順帝 7
      - □
        - 武宗 3
          - 明宗 8—寧宗 10、順帝 11
          - 文宗 9
        - 仁宗 4—英宗 5
      - 成宗 2
    - 旭烈兀

交通の發達

前に述べたやうに、蒙古は亞細亞から歐羅巴にかけて廣大な地域を領有したので、これ等兩大陸間の交通は自然に頻繁になつた。その上、蒙古は早くから諸方に道路を開き、驛站（エキタン）（宿場（シュクバ）の義）を設け、往來の便利を計つたから、旅行は比較的容易になり、遠方の人々の蒙古や支那に來たものも少くなかつた。羅馬教皇や佛蘭西王の使者は、早くも定宗や憲宗の時代に蒙古に來り、有名な伊太利（イタリヤ）人マルコ＝ポーロ(Marco polo)は世祖の時に來遊した。海路の交通貿易も依然として盛んで、杭州や泉州などは東西貿易の中心地となり、亞剌比亞人を始め、多くの外國人が來住した。




元の金銀牌　使節や功臣に帶ばしめて諸種の特權を與へた證據としたもので、右は近頃發見せられた成吉思汗の漢字金牌、左は元の國字銀牌である。

マルコ＝ポーロ

マルコ＝ポーロは伊太利ヴェニス(Venice)の人で、十七歳の時商人であつた父や叔父に伴はれて陸路を東方に向ひ途中四年ばかりを費して世祖の許に着いた（一二七五年、我が後宇多天皇の御代）。この後十七年間元に止まつて世祖に寵用せられ、四十一歳の時に海路を經て郷里に歸り着いた。歸國後東方で見聞したことを人に語り聞かせたものが、その旅行記として世に行はれ、有名になつた。その中にはチパング(Chipangu)（日本國の音を訛つた名）といふ名で我が國の事をも記し、特に黄金に富めることを誇張して、國王の宮殿の屋根床（ユカ）窓、さては鋪石（シキ）の代りにまでも黄金を用ひて居るなどと述べた。この記事は大いに世人の注意を惹き、有名なコロンブスの如きも、この黄金國を發見しようとして航海に上つたのだといはれて居る。この旅行記によつて、我が國は始めて歐洲に知られることになつたのである。



マルコ＝ポーロの像

元代の文化　西方文化の影響

交通の發達に伴つて、西方諸國の文化も東方に傳播し、元の文化に大なる影響を與へた。羅馬教皇の使が世祖の許可を受けて大都に教會堂を建て、基督教を布教して以來、元代を通じてこの教が流行し

趙孟頫の書

園樹即是河陽一縣花桓大司馬聞而歎曰昔年移柳依依漢南今看搖落悽愴江潭樹猶如此人何以堪
貞觀四年十月八日爲燕國公書
大德三年九月三日吳興趙孟頫臨

たこと、西域の天文・暦法・醫學・砲術等の傳はつたことなどは、その著しい例である。

經學・詩文の不振と通俗文學の發達

併しながら元の朝廷は一般に支那固有の文化に對する保護獎勵に冷淡であつたから、この時代には經學も詩文もあまり振はず、ただ戲曲・小說など通俗文學だけが著しく發達した。有名な西廂記や水滸傳のやうな名作は、みなこの時代に著はされたものである。

美術

美術も概していふと盛んではなかつたけれども、しかも初期時代の趙孟頫（子昂）は書・畫兩道に秀で、末期に出た黄公望（大癡）・倪瓚（雲林）等は高尚な畫風で名を揚げた。


倪瓚の畫

第十九章　明（その一）

太祖の創業

明の太祖は元代に行はれた諸種の惡政を除いて人望を收め、ついで制度を改革して一新の政を行ひ、宰相を廢して親ら政治の大本を握り、從來よりも一層君主の權力を强めた。また太祖は諸方の要地に子弟を分封して、帝國の固とした。併し古來屢〻認められる例の如く、これ等の諸王は次第に强大となり、間もなく、却つて帝室を脅すことになつた。


明の太祖の像

成祖の簒立

そこで太祖についで立つた惠帝（建文帝）は、諸王の勢を削ることに著手したところ、北平（今の北平）に據つた燕王朱棣（太祖の第四子）は兵を擧げてこれに叛き、金陵に迫つた。惠帝はこれを防ぎ得ずして


明の成祖の像

成祖陵前の石人　陵は河北省昌平縣城の北方に在る。石人は成祖に仕へた文武の功臣の像である。

出奔し、燕王が代つて帝位に即いた（一四〇二）。これが成祖（永樂帝）である。

前漢の武帝の時に始めて建元といふ年號を用ひた（紀元前一四〇）。その後歴代必ず年號を建て、また同じ天子の一代にも屢〻これを改めたが、明以後は天子一代にただ一つの年號を用ひることに定められた。從つてこれから後は、年號を以て天子を稱することも行はれるやうになつた。我が國を始め、東方諸國でもみな年號を用ひたが、これは支那文化の影響を受けた諸國に認められる特徵で、その以外の國にはないことである。

成祖の內治

成祖は都を北平に遷して北京と稱し（これに對して金陵を南京といつた）、敎育の奬勵、產業の發達を計るなど、大いに內治に努力して明朝の基礎を固め、外に向つても諸方を經略して國威を輝かした。



成祖の外國經略

當時、元の餘衆はなほ外蒙古に據り、明に從はなかつたので、成祖は親征してこれを破り、ついで、その西方に據つて威を振つた瓦剌（ウエラ）をも征服した。

外蒙古地方の平定

南方の經略

成祖はまた南方の安南地方を平定し、別に鄭和（テイワ）に命じ、艦隊を率ゐて遠く南海諸國を威服し、明に入貢せしめた。明からもまたこれ等の諸國に通商し、或は移住するものも漸く多くなつた。

鄭和の遠征

鄭和は永樂三年（一四〇五）水軍四萬人を率ゐて南海に航行したのを始とし、以後凡そ三十年間に七回も遠征に從ひ、一度は阿弗利加の東岸までも行つた。この遠征は海外に逃れた惠帝を搜すといふ名で行はれたが、同時に南海諸國を歸服せしめることを目的とし、諸國に天子の詔を宣べ、明の產物を示して入貢を促し、聽かない時には兵力を以て迫つた。そこで鄭和の名は內外に轟き、後には爪哇に移住した支那人の間に、商賣の繁昌や、一身の安全を保護する神として祭られるに至つた。



帖木兒の像

帖木兒帝國

元の末頃、中央亞細亞に蒙古族の血統を引いた帖木兒（チムール）（Timur）といふ英傑が出で、當時蒙古

我が紀元二〇五二年、後龜山天皇の御代


朝鮮の太祖の像


明の神宗の像

滅ぼして王位に上り(一三九二)、漢陽(今の京城)に都し、國を朝鮮と號した。これが朝鮮の太祖である。その後太祖八世の孫宣祖の時に、我が豐臣秀吉は王に入貢を勸め、且王をして明の朝貢を促さしめようとしたが、朝鮮は太祖以來明の封册を受け、その朝貢國となつて居つたから、これに應じなかつた。そこで秀吉は文祿元年(一五九二)朝鮮征伐の軍を出し、到る所に大勝利を得た。朝鮮は救を明に求めたので、明の神宗(萬曆帝世宗の孫)は大軍を出してこれを援けたけれども敗北し、これより國勢愈〻衰運に向つた。

第二十一章　明代の文化　歐人の東航

明の學術

宋學・陽明學の流行

明代には太祖・成祖等みな學問を奬勵し、宋學が盛んに行はれたが、その中世には王守仁(陽明)が出て、別に學說を立てた。即ち知行合一說で、宋學が理を知ることを重んずるに對し、ただ知るばかりでなく、知つて實行しなければならぬことを說き、次第に世に行はれた。


文徵明の畫

美術・工藝

美術・工藝は宣宗時代に隆盛を極め、畫は戴進(文進)が出て北宗畫の妙技を振ひ、工藝では銅器・陶磁器の製作が大いに發達した。その後、繪畫は南宗畫が流行し、文徵明や董其昌(トウキシヤウ)の如き名家が出た。この兩人はまた書道の大家としても知られて居る。




宣宗宣德時代の陶器

文學

通俗文學も元代の後を受けて益〻發達した。

明代の社會

元の社

里甲の制

會には蒙古の習俗が少からず行はれたが、明代にはこれを一掃して、再び漢族の舊に立ちかへつた。教化の廣く及んだことや、自治組織の整つたことも、明代社會の特徴である。民衆の自治は早くから支那に行はれたことであるが、明代には特にその完備を見ることになつた。即ち十戸を甲とし、十甲を里とし、それぞれ甲首・里長を立てて自ら事を治めさせ、別に里老を選んで人心の善導、里內の訴訟の裁判等に當らせる組織で、所謂里甲の制である。

明と我が國

元の末に足利尊氏が天龍寺船を出した後を受けて、義滿や義教の時には盛んに明と貿易し、我が硫黃・刀劍の類を輸出し、明の銅錢・陶磁器等を輸入した。これと共に使節・學僧等も往來したので、明の學術・文藝も我が國に傳へられて流行し、殊に宋學で尊んだ四書（論語・大學・中庸・孟子）は德川時代に於ける一般教育の中心となつた。

歐洲人の東方航路發見

蒙古の一統が瓦解し、その領土の分裂した後は、歐洲と東方との交通は、陸路も海路も危險が多かつたので、歐洲人は別に東方に到る安全な航路を發見しようとし、屢々探檢に從事した。その結果葡萄牙人（ポルトガル）ヴァスコ＝ダ＝ガマ（Vasco da Gama）は阿弗利加の南端を廻つて印度に達した。これが明の孝宗（弘治帝、英宗の孫）の時である（一四九八）。

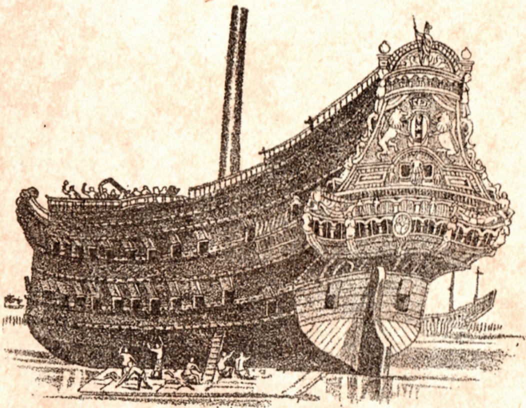
我が紀元二一五八年、後土御門天皇の御代



ヴァスコ＝ダ＝ガマの像

歐人の東來

これから後は葡萄牙人の東方に來るものが次第に多くなり、印度では西海岸のゴア（Goa）を占領して（一五一〇）根據地とし、進んで支那海に入つて阿瑪港（アマカオ）（Amacao）（廣東省澳門）に據り、明や我が國とも盛んに通商した。その後西班牙人（イスパニヤ）はフィリッピン（Philippines）諸島を占領して（一五六五）マニラ（Manila）に據り、葡萄牙人と競爭したが、ついで和蘭人（オランダ）は爪哇を占領してバタヴィヤ（Batavia）を根據地とし（一六一九）、更に臺灣を取り（一六二四）葡萄牙・西班牙の兩國を押退け、東方の貿易を獨占した。この間に英吉利人（イギリス）及び佛蘭西（フランス）



和蘭の東洋航海船の圖

人もまた印度に來り、各、その勢力を張らうとして競爭した。

基督教及び西洋學術の東漸

東洋航路が開かれると、基督教の宣教師も續々東方に來て、熱心に布教に從事した。中にもジェスイット派(Jesuites)の活動は最も著しく、フランシス＝サヴィエル(Francis Xavier)はまづ印度に來り、轉じて我が國に來て(一五四九、天文十八年)布教し、ついでマテオ＝リッチ(Matteo Ricci)(利瑪竇)は明に來り、神宗の優遇を受けて北京に會堂を建て、多くの信徒を得た。この派の基督教を天主教といふのである。これ等の宣教師はみな天文・暦法・數學・測量等の學問に達して居つたから、或は明に仕へて天文臺を司り、或は書物を著して西方の學術を講ずるなど、西洋文化を支那に輸入する魁(サキガケ)となつた。



マテオ＝リッチの像

マテオ＝リッチは伊太利の人で、明に來た天主教宣教師の先驅者であつたのみならず、その中で最も學德ともに優れた人物であつた。彼が始めて支那に來て阿瑪港に着いたのは一五八〇年(萬暦八年)で、二十八歳の時であつた。その後二十年ばかりを南方に過ごして、一六〇一年北京に入り、神宗に謁した。この時獻上した種々の土産物の中、報時自鳴鐘即ち時計が最も神宗を喜ばせたといはれて居るのは、今から考へると興味深いことである。彼は明に於て多くの書を著したが、その世界地圖は、萬國の形勢を正しく東方に傳へた最初である。

第二十二章　清

清の興起

明の神宗の時、もとの女眞部族の中に努爾哈赤(ヌルハチ)といふ人があつて、赫圖阿拉(ホトアラ)(今の新賓)から起り、次第に滿洲の諸部を從へ、後金國を建てた(一六一六)。後に清の太祖といふのはこの人である。神宗は朝鮮と連合してこれを攻めたが却つて大敗し、後



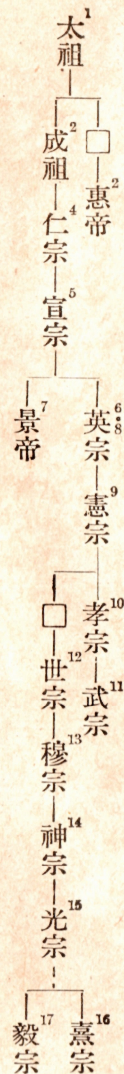
清の太祖瀋陽に進軍する圖　清の宮廷に傳はつた實錄に見えて居る圖である。

我が紀元二三〇四年、後光明天皇の御代

金は進んで瀋陽(シンヤウ)(奉天)を取り、ここに都した。太祖の子太宗は國號を清と改め(一六三六)、內蒙古諸部を從へ、朝鮮を討つて朝貢國とし、更に明の北邊をも侵した。

明の滅亡

明は神宗以來益〻衰へ、その上屢〻飢饉があつて、國內騷動したので、毅宗(崇禎帝、神宗の孫)の時、李自成がこれに乘じて陝西から起り、遂に北京に入つて明を滅ぼした(一六四四)。明は太祖の建國以來二百七十七年を經て亡びた。




奉天宮殿の大政殿

清の一統

この時清は世祖(順治帝、太宗の子)の代であつたが、軍を進めて李自成を破り、都を北京に遷し(一六四四)、更に江南諸方に據つた明の諸王を滅ぼし、支那全土を一統した。


聖祖康熙帝の像

この際明の遺臣鄭成功(テイセイコウ)は臺灣に入つて和蘭人を逐ひ(一六六一)、この地に據つて明を恢復しようとしたが、志を遂げずして死んだ。その子孫も清に反抗を續けたが、世祖の子聖祖(康熙帝)の時になつて遂に清軍に滅ぼされ、臺灣は清の領土となつた。

清の隆盛

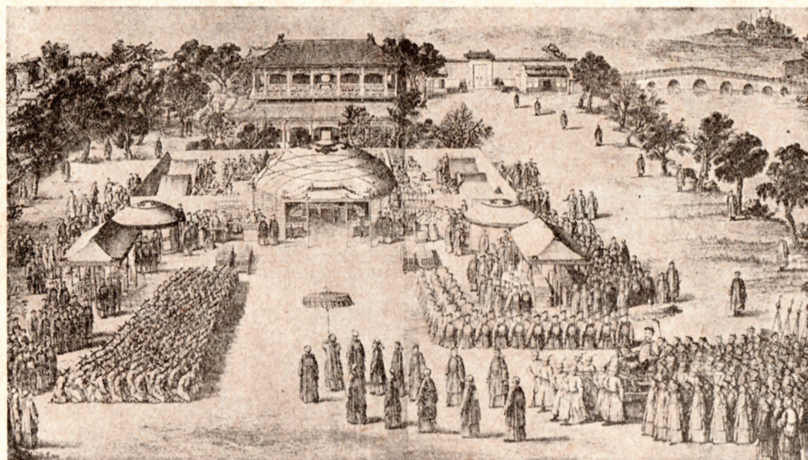
聖祖の時、明の降將吳三桂等が內亂を起したが平げられ、清は益〻國內を固めることを得た。この後聖祖は外に向つて外蒙古を歸服させ、西藏を從へ、その孫高宗(乾隆帝)は天山南・北兩路を平定したから、葱嶺以東、西比利亞以南の地はみな清の領土となつた。この外にも高宗は南に向つてバルマ(Burma)・安南を討ち、また暹羅を懷(ナツ)け、各〻清の朝貢國とした。かくの如く聖祖(一六六一—一七二二)及び高宗(一七三五—一七九六)の時には、清の國運は



高宗乾隆帝の像

隆昌を極め、それにつれて文化も著しく發達し、後世康熙・乾隆(ケンリユウ)の時代と稱して推奬する盛世を出現した。併しながら清の盛運はここに極まり、これから後は内憂・外患相ついで起り、次第に衰態を現した。

第二十三章　清代の制度及び文化



高宗回部（天山南・北兩路）平定の將士を親閲する圖　輿に乘つたのが高宗である。

滿洲風俗の維持

清は支那を從へた後にも、滿洲固有の尚武の風俗を維持しようとし、漢人に對しても、服は窄袖(サクシウ)(ツツソデ)、髪は辮髪(ベンパツ)を强制したが、政治に於ては大概明代の制度を承繼いだ。

清代の制度

即ち中央政府には、上に内閣があつて、大學士がその政務を統べ、内閣の下に六部（吏・戸・禮・兵・刑・工）を置いて政を分擔させ、別に蒙古・西藏等の行政を掌る理藩院があつた。その後高宗の時から軍機大臣を置き、軍國の政務を執らしめたので、大學士の權も次第にその手に移り、遂に軍機大臣が天下の政治を總理する有樣となつた。

地方は支那本部を十八省（直隸・山東・山西・河南・江蘇・安徽・浙江・江西・福建・廣東・廣西・甘肅・陝西・四川・湖南・湖北・雲南・貴州）、滿洲を三省（盛京・吉林・黑龍江）、天山南・北兩路を一省（新疆）とし、滿洲三省を除いて他の各省に巡撫・提督を置き、各、民政と軍務とを分けて治めさせ、また大抵二省ごとに總督を置いて、文武の全權を統べさせた。

滿洲人の男子は頭髪を剃り、後(ウシロ)にだけ丸く殘し、辮(ア)んで長く垂らした。謂はゆる辮髪である。漢人は初、この異俗に從ふことを甚しく嫌つたので、世祖も一時辮髪令を撤回したけれども、また更めて十日以内にこれを

辮髪圖



勵行せしめ、「頭を留むるものは髪を留めず、髪を留むるものは頭を留めず」といふ令を出した。これから清一代の間、漢人もみな辮髪することになつた。初はかく嫌つた風俗であつたけれども、清朝が亡んで今の中華民國になつた時には、却つて長く馴れて來た辮髪を切去るのを嫌ふものが甚だ多かつた。面白い風俗の變化である。

清代君主權の發達

宋から明にかけて強大になつた君主權は、清の時代に愈〻發達し、政治を總理する軍機大臣も、實際上はただ天子の命ずるままに政務を取扱ふだけで、君主專制の政治はここに至つて完成した。

清代の文化

康熙・乾隆の兩朝は前にも述べたやうに、清一代の中、すべてが最も發達した時代で、文化の光の輝きわたつたのも、この頃が絕頂である。

考證學の發達

學術に於ては、經學に閻若璩・史學に錢大昕・文字の學問に段玉裁等の如き學者が出て、謂はゆる考證學の隆盛期を作つた。考證學といふのは明末清初に在世した顧炎武が主として開いた學風で、理論を偏重する宋學に對し、正確な事實を證據として論述するのが特色である。

錢大昕の書簡

當覓便寄去因使人旋並候
新禧不備
弟大昕頓首
十二月

編纂事業

學問の隆盛に伴つて著述編纂の事業も盛んに行はれ、圖書集成・四庫全書のやうな驚くべき大部の書籍が續々勅撰せられた。

藝術

藝術もまた發達し、聖祖の時には王翬（石谷）・惲壽平（南田）が出て山水花鳥畫に妙技を振ひ、高宗の時には翁方綱・劉墉（石庵）等が出て書道に名聲を擧げた。



王翬の山水畫

圖書集成と四庫全書

圖書集成は聖祖の時編纂に着

手し、次の世宗の時に出來上つた。廣く古來の書物を集め、その記事を類別して編纂したもので、卷數一萬卷に達し、かかる種類の書物中の傑作といはれて居る。四庫全書は高宗が國內に現存する書を集め、その中の三千四百五十八種を收め、且、各書に一々その大要を掲げ、また評論を加へたものである。全書は出版せられるに至らなかつたけれども、北京の宮殿と離宮の圓明園、奉天及び熱河の宮殿との四箇所に各一部を藏し、また揚州・鎭江・杭州三箇所に圖書館を造つて一部づつを備へ、學者に閱覽させた。書物を集める事業は古來少くないけれども、かくも大規模の蒐(シウ)集(シフ)編纂は實に空前のことである。



惲壽平の菊花圖

淸代の社會

清は國初その民族性の維持に勉め、漢族をして滿洲の風習に從はしめるまでに至つたが、しかも大體に於て元代のやうに漢族を壓迫せず、また漸次漢文化に同化し、遂に固有の滿洲語をも忘れてしまふ有樣となつたので、滿・漢兩族の間に左程著しい隔(ヘダタリ)を生じなかつた。從つて明代漢族の社會は、この時に於ても激變を見ることなくして發展を續けた。

西洋學と基督教

清朝でも明代に續いて天主教の宣教師が朝廷に用ひられ、世祖の時にはアダム=シャール(Adam Schall)（湯若望）、聖祖の時にはフェルビースト(Verbiest)（南懷仁）等が天文臺を司り、砲術・數學等の進步をも助けた。殊に聖祖は彼等を諸方に遣はして測量に從事させ、



天主教宣教師の作つた地圖
盛京省（今の滿洲國奉天省）の一部で地名は滿洲字で記してある。

基督教の中絶

始めて正確な地圖を作らせた。かくの如く天主教の宣教師は西洋の學者として朝廷に用ひられ、その間に基督教の布教に從つたのであつたが、その布教の方法について、他派の宣教師等と爭論を生じたので、聖祖は天主教以外の諸派を禁じ、次に世宗の時にはすべて基督教を嚴禁することになつた（一七二三）。それで後に文宗（咸豐帝）の時、北京條約（一八六〇）によつて、基督教の公布を承認せらるるに至るまで百三十餘年の間は、清に於ける基督教は中絶の狀態に置かれたのである。

英・佛の印度經略

第二十四章　歐洲諸國の東方經略（その一）

前に述べたやうに、明の末頃には歐洲諸國の人が競うて東洋に來たが、その中、英吉利人と佛蘭西人とは第十七世紀の初、殆ど同時に東印度會社を建て（英は一六〇〇、佛は一六〇四）、專ら印度の貿



印度略圖

易に從ひ、英人はマドラス(Madras)・ボンベイ(Bombay)・カルカッタ(Calcutta)、佛人はポンヂシェリー(Pondicherry)・シャンデルナゴル(Chandernagor)等を根據地として、勢力の擴張に力を盡した。その後兩國人の競爭が烈しくなり、遂に第十八世紀の半頃兩者の間に戰が開かれた（一七四四）が、英のクライヴ(Clive)は佛軍を擊破り（一七五七）、最後の勝利を得、印度に於ける英人の勢力を固めた。



クライヴの像

我が紀元二四一七年、桃園天皇の御代

英吉利の印度帝國

當時印度は、帖木兒五世の孫バベル(Baber)の建てた（一五二六）ムガール(Mughal)帝國の衰退時代であつたから、英人はこれに乘じて次第に印度を侵略し、その後土民の間に英人擊攘の大亂が起つたのを機會に（一八五七）、遂に皇帝を廢してムガール帝國を滅ぼした。この時まで印度の事は英國東印度會社で支配したが、これから後は英國政府の直轄となり、ついで英吉利

我が紀元二一八六年、後柏原天皇の御代



バベルの像

バルマ及び馬來半島の經略

國王が印度皇帝の位を兼ねることになつた（一八七七、明治十年）。かくして印度を奪つた後、間もなく英吉利はまたバルマを征服し（一八八六、明治十九年）、馬來半島の諸小國をもその保護國とした（一八九五、明治二八年）。

ムガール帝國



アウラングゼブ帝の像

ムガールは蒙古即ちモンゴルを訛つた名で、帖木兒が蒙古の血統である關係から、バベルの印度に建てた帝國をかく稱したのである。　印度は古來とかく國民の間に一致を缺き、全土の一統せられたことは稀であるが、ムガール王朝のアウラングゼブ（Aurangzeb）の時には、殆どこれを一統した（一六八六）。　併し王の死後は名主なく、國勢衰へた。

清・英の衝突

英吉利の東印度會社は、かねてから印



英艦の廣東港攻擊

阿片戰爭



南京條約締結の光景　場所は英吉利船中の一室である。

度に產する阿片を盛んに清に輸出し、巨利を得たが、宣宗（道光帝、高宗の孫）は阿片の害毒と、この爲に銀の流出が多いのとを恐れて、林則徐を廣東に遣はし、嚴重に阿片貿易を禁止させた（一八三九）。　これが原因となつて、兩國の間に戰が起り、英國の艦隊は、廣東を始め沿岸の諸港を封鎖し、進んで南京に迫つた。　そこで清は英吉利との間に南京條約を結び（一八四二）、償金（二千百萬弗）を拂ひ、香港を割讓し、廣東・厦門・福州・寧波・上海の五港を開くことを約して和睦した。

長髮賊の亂

清が阿片戰爭に敗れた影響は頗る大きく、外國からは弱勢を見ぬかれ、國內では威嚴を失ひ、諸方に動搖を生ぜしめた。　この機に乗じ、基督教徒の洪秀全は漢人の天下を復興するを名と



洪秀全の像

して廣西で亂を起し（一八五〇）、國を太平天國と號した。その下に屬するものは滿洲風の辮髮をやめて頭髮を長く伸ばしたので、長髮賊と呼ばれた。文宗（咸豐帝、宣宗の子）は軍を出して叛亂を鎭めようとしたが、賊軍の勢は次第に盛んになり、進んで南京に據つた。そこで曾國藩や李鴻章等は勤王軍を起し、諸方に敵を破つたけれども、なほ討滅するに至らなかつた。

英・佛軍の侵入

かかる際に清の官吏は廣東で英人と爭を生じ、廣西でも佛國の宣教師が清の官吏に殺された事件が起つたので、英・佛の軍は聯合して清に迫り、遂に天津・北京を陷れた。そこで清は北京條約を結んで兩國と和し（一八六〇）、償金（八百萬兩づつ）を拂ひ、



太平天國基督教徒の家で小兒に祈禱を教へる圖

新たに牛莊（ニューチャン）・漢口（ハンカオ）・芝罘（チーフー）等の七港を開き、基督教の布教、公使の駐在をも承認することにした。

この事件が終ると間もなく文宗は死んでその子穆宗（同治帝）が位に即き、長髮賊の討伐に力を盡し、遂にこれを平定した（一八六四）。



曾國藩の像とその書

洋槍隊・常勝軍

當時歐米諸國は長髮賊の亂に對して、中立の態度を取つたが、個人としては官軍にも賊軍にも參加したものがあつた。中にも米人ワルド（Ward）は、歐米人の士官の下に嚴重な規律によつて支那人を訓練し、洋槍隊と呼ばれた軍隊をつくり、李鴻章の依賴を受けて諸方に戰



ゴルドンの像

ひ常勝軍の名を得た。同治元年（一八六二）ワルドが死ぬと、英人ゴルドン(Gordon)がこの軍を指揮して益々軍功を擧げ、賊を平げるに少からぬ手柄を立てた。

第二十五章　歐洲諸國の東方經略（その二）

露西亞の東方經略

露西亞の滿洲侵略圖

明の神宗の時から、露西亞は東に向つて西比利亞の經略を始め、清の太宗の末頃には滿洲の北邊まで侵入して來たが、清はこの頃南方の平定に忙しくて、これを顧みることが出來なかつた。聖祖の時になつて始めて兵を出して露人を逐退け、尼布楚(Nertchinsk)條約を結んで（一六八九）、露西亞の侵略した滿洲の地を取還し、外興安嶺を兩國の境とすることに定めた。併し露西亞は、その後、清が長髮賊の亂に苦しんで居るのに乘じ、また侵入して黑龍江以北の地を取り（一八五八）、ついで英・佛聯合軍の北京を占領した機會に、ウスリー江以東の地を得（一八六〇）、ウラジウォストック(Vladivostok)に軍港を設けて、極東に於ける根據地とした（一八六一）。我が國に千島を讓り、その代りに樺太を得たのは、この後十五年を經た時（明治八年一八七五）のことである。別に露西亞は中央亞細亞の方面からも清を侵し、一時伊犁を占領した（一八七一）が、その後、清は償金を拂つてその大部分を回收した。



佛蘭西の東方經略

佛蘭西の印度支那侵略圖

清の仁宗（嘉慶帝、高宗の子）の時、安南では阮福映が、佛蘭西の基督教宣教師等の援によつて王となり（一八〇二、今の安南王家の祖）、越南といふ國號を立て、清の封冊を受けてその朝貢國となつた。然るに越南では屢々宣教師を虐待したので、佛蘭西は兵を出して越南を討ち、交趾支那を割讓させ（一八六二）、ついで東蒲寨(Cambodia)を保護國とした



（一八六七）。その後佛蘭西は越南の同意を得ずして、擅に軍隊を東京(トンキン)(Tongking)地方に駐屯せしめたので、越南はまた佛蘭西と戰つたが敗北に了り、遂に佛蘭西の保護國となり、且、東京地方を割讓することを約して和を結んだ（明治十六年一八八三）。併し越南は清の封册を受けた國であるから、清はこれを承認せず、遂に清・佛兩國の間に戰が開かれたが、間もなく和睦して清はこの和約を認めることになつた（明治十八年一八八五）。

日清戰爭

第二十六章　清と我が國

我が國は明治維新の後、開國の大方針に從ひ、明治九年（一八七六）朝鮮と通商條約を結んだが、清は太宗以來の關係により朝鮮を屬國として扱つたので、明治十八年（一八八五）我が國は更に清と天津條約を結び、以後兩國は朝鮮に對して同一の權利を有することを定めた。然るに明治二十七年（一八九四）朝鮮に內亂が起つたので、我が國は清と協同して朝鮮の爲に力を盡さうとしたが、清はなほ朝鮮がその屬國であることを主張し、我が國の申出を拒絕した。そこで我が國は、その暴戾(バウレイ)を責めてこの年八月戰を宣し、遼東半島を取り、威海衛(山東)を陷れたので、翌年清は李鴻章を我が國に遣はして和を請うた。



李鴻章の像

下關條約と三國干涉

我が國は伊藤博文等に命じ、李鴻章と下關で談判せしめ、(一)清國は朝鮮の獨立を承認し、(二)償金二億兩（約三億圓）を出し、(三)遼東半島・臺灣及び澎湖島を割讓し、(四)沙市(湖北)・重慶(四川)・蘇州(江蘇)・杭州(浙江)の四港を開くことなどを約して和睦した。然るにかねてから東方經略に從つて居た露西亞は、遼東半島が我が國に讓られるのを見て不平を懷き、獨逸(ドイツ)・佛蘭西と共にこの和約に干涉し、我が國に對して半島の還附を勸めたので、我が國も代償（三千萬兩、約四千五百萬圓）を收めることにしてこの勸告に從つた。



德宗光緒帝の像

歐洲諸國の強要と戊戌の政變



西太后の像

この後、諸外國は清の國力の衰微に乘じて種々の要求をなし、獨逸は膠州灣(山東)を(一八九八・明治三十一年)、露西亞は遼東半島を(同年)、英吉利は威海衞を(同年)、佛蘭西は廣州灣を(一八九九・明治三十二年)各〻租借地とした。當時清では、穆宗について立つた德宗(光緒帝)が位に居り、かかる形勢に對し、內政を改革して國力を張らなければならぬと考へ、康有爲を用ひてその計畫を進めたが、守舊派に妨げられて幽閉せられ、西太后(穆宗の母)が政を執つた(一八九八)。謂はゆる戊戌(ボジュツ)の政變である。

康有爲の意見

康有爲は漢學にも西洋の學にも通じた學者であつた。彼は清の國勢の振はないのは、國家の制度が時勢に適應しない爲であるとし、我が國の明治の新政を手本とし、萬事公論に聽いて



西太后の畫

新に制度を立て、舊弊を一掃しなければならぬと主張した。德宗はこの意見に從ひ、頻りに詔を出して改革に着手したが、當時大官等の多數は、なほ世界の形勢に通ぜず、新政に反對したので、革新の企は全く失敗に了るに至つた。

北清事變

かくて改革は成らず、外人の勢力は益〻盛んになる有樣であつたので、明治三十二年基督敎及び外人の排斥を名とする暴徒が、義和團と稱して山東省に起り、次第に勢を得、翌年進んで北京に入つた。この時清廷もまた兵を出して義和團と合し、列國に宣戰してその公使館を圍んだので、日・英・米・露・佛・獨・墺・伊の八國は聯合軍を組織して北京を陷れた。そこで西太后は德宗と共に西安(陝西)に逃れ、慶親王・李鴻章等に命じて列國と交涉せしめ、主謀者を罰し、償金四億五千萬兩(六億七千五百萬圓)を出すことを約して和を結んだ(一九〇一・明治三十四年)。

第二十七章　露西亞と我が國

露西亞の滿洲占領

露西亞は明治二十四年(一八九一)西比利亞を通じて本國とウラジウォストックとを連絡する鐵道の大工事に着手し、遼東半島を租借してからは、その支線を布設して大連・旅順口まで達せしめた。北清事變が起ると、露西亞はこれ等の鐵道で優勢なる軍隊を輸送して滿洲を占領し、講和の後にも撤兵しないのみならず、更に朝鮮をも威壓し、その獨立を危くした。

日露戰爭

これに對し、我が國は英國と同盟を結んで(一九〇二、明治三十五年)極東の平和を計り、また屢、露西亞に交渉して、滿洲から軍隊を引揚げることを促したが、露西亞はこれに應じなかつたので、遂に國交を斷つて戰を宣し(一九〇四、明治三十七年二月)翌年陸軍は奉天の戰(一九〇五、明治三十八年三月)海軍は日本海の戰(同年五月)で全く露西亞の勢を挫いた。

日露の講和

間もなく米國大統領ルーズヴェルト(Roosevelt)の勸によつて和議が起り、我が小村壽太郎等は露西亞の使節ウィッテ(Witte)等と、米國ポーツマス(Portsmouth)に會し、(一)露西亞は朝鮮に於ける我が國の宗主權を認め、(二)遼東半島の租借權、長春より旅順口に至る鐵道及び樺太島の南半部を我が國に讓り、(三)滿洲より撤兵することなどを約して和を結んだ(同年九月)。



ポーツマス講和會議の圖　向つて左側中央は小村壽太郎、右側中央はウィッテである。

東洋の平和と我が國の活動

我が國は日露戰爭中、英國との間に前の同盟を一層擴張して、印度以東の平和を計る同盟を結び(一九〇五、明治三十八年八月)、その後佛・露(一九〇七、明治四十年)・米(一九〇八、明治四十一年)の諸國とも議つて、清國及び相互の領土の保全を約し、東洋の平和を保つ上に力を盡した。

朝鮮併合

また朝鮮には、日露戰爭後、我が國から統監を派遣し、その政を輔けて改善を計らせたが、それにも拘らず屢、動亂が企てられたので、明治四十三年八月(一九一〇)に至り、我が國は兩國民の幸福及び東洋平和の爲に朝鮮を併合し、總督を置いてこれを治めさせることにした。

清の革新

西太后

第二十八章　清の滅亡　中華民國（その一）

日露戰爭の結果を見た清國では、我が國に倣つて諸制を革新し、國勢を發展せしめようとし、遂に從來の政體を改めて立憲制度を施くことに定め、その準備に着手した。間もなく德宗も西太后も相ついで死し、幼年の宣統帝（德宗の甥）が位に即き、その父醇親王が攝政することになつた（一九〇八 明治四十一年）が、この頃輿論は頻りに國會を早く開くことを要求したので、政府は宣統五年（一九一三 大正二年）からこれを開設することを約束した。



宣統帝と醇親王の像

右は幼年の宣統帝、椅子に坐せるは醇親王で、親王の抱いて居るのは宣統帝の弟である。

西太后は文宗の妃で、穆宗の生母である。穆宗は六歳の幼年で即位したので、その在位十三年の大部分は東太后（文宗の皇后）と西太后が政を聽き、穆宗につ

革命の亂と清の滅亡

いで、また僅に四歳の德宗が立つてからも同樣であつた。間もなく東太后は死し、西太后獨りで政を執つたが、德宗が十九歳の時に一旦政權を還した。しかも實際には國政に與ること、依然として變らなかつた。德宗の改革は、この親政の間に起つた事件である。戊戌政變の後はまたもや西太后が政を執り、光緒三十四年（明治四十一年）に死ぬまで前後を通じて實に四十七年間、直接間接に政權を握つた。西太后は明敏果斷、男まさりの人であつたが、その政治には失敗も少くなかつた。それは兎も角、殆ど半世紀の間、内外多事を極めた清朝を背負つて活動した女流政治家として、重要な位置を史上に占める人である。

それにも拘らず、當時清朝を打ち倒して漢人の國家を建てようとする風潮が次第に盛んになり、遂に明治四十四年（一九一一）十月



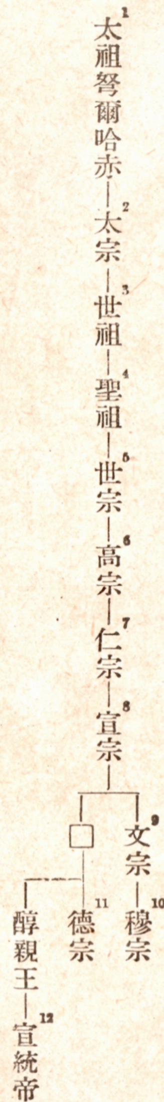
革命の初、武昌の對岸漢口が、兵火の爲大火災を起した光景

中華民國


孫文の像

革命黨は武昌（湖北）に兵を擧げた。一旦革命の烽火が擧がると、これに應ずるものが諸方に起り、共和政府を南京に建て、中華民國といふ國號を立て、孫文（逸仙）を推して臨時大總統とした（同年十二月）。清朝は袁世凱を用ひてこの難局に當らしめたが、大勢の歸するところ如何とも爲しがたく、宣統帝は遂に共和政體を認め、皇帝の尊號と年金とを受けることを約して退隱した（一九一二明治四十五年二月）。清は建國以來二百六十八年を經て亡びた。

清室諸帝略系



最初の大總統袁世凱


袁世凱の像

翌年袁世凱は國會から選ばれて最初の大總統に就任し、中華民國は列國の承認を得た（一九一三大正二年十月）。間もなく袁世凱は帝政を復興して自ら帝位に上らうとしたが、目的を達せずして病死し（一九一六大正五年六月）、副總統黎元洪が代つて大總統になつた。

黎元洪大總統となる

世界大戰爭と日・支兩國

これよりさき歐洲に大戰亂が起つた（一九一四大正三年）ので、我が國は英國との同盟に基づき、東洋平和の爲に獨逸に宣戰し、膠州灣を占領して東洋に於ける獨逸の勢力を一掃した。中華民國でも、政府はこの大戰に參加しようとしたが、國會は政府と意見を異にし紛擾を生じた。この時安徽督軍張勳は、黎元洪に迫つて國會を解散させ、ついで自ら軍を率ゐて北京に入り、一時宣統帝を復位せしめた（一九一七大正六年七月）。併し張勳

張勳の復辟


黎元洪の像

南北對立

は間もなく失敗し、黎元洪も辭任したので、副總統馮國璋が大總統に代り、獨逸・墺太利に宣戰した（同年八月）。


徐世昌の像

翌年馮國璋は新議會を召集して大總統の選擧を行ひ、徐世昌が就任した（一九一八大正七年十月）。併し舊議員の多くは、さきに國會の解散せられたことを不當とし、別に孫文を大元帥として廣東に軍政府を開き（一九一七大正六年九月）、西南の諸省がこれを助けて居つたので、民國の統一は破れ、新たに南北對立の形勢を生じた。

廣東の軍政府

上海和平會議

その後兩政府は列國の勸により、上海に和平會議を開いた（一九一九大正八年二月）が無效に終り、孫文は後に更めて南方の大總統に就任した（一九二一大正十年五月）。

第二十九章　中華民國（その二）

山東問題の紛擾

大正四年（一九一五）五月、我が國は支那と條約を結び、前年我が國が獨逸と戰つて占領した膠州灣を、世界大戰の終つた後に支那に還附することを約すると共に、（一）獨逸が山東省に有した利權を我が國に承繼ぎ、（二）我が國の遼東半島租借期限を延長し、（三）南滿洲及び東部內蒙古に於ける我が國の優越權を承認させることにした。

日支條約

日支條約破棄運動の失敗

然るに大戰が終つて巴里に講和會議の開かれた時（一九一九大正八年一月）、支那は列國の同意を請ひ、獨逸から直接山東の還附を受け、この約束を破らうとしたが失敗した。

華盛頓會議

九國條約

大正十年（一九二一）十一月、日・英・米・佛・伊の五大國は米國大統領ハーディング（Harding）の主唱により、同國華盛頓（Washington）に會議を開き、各國海軍力の比率、太平洋方面に於ける各國領土權の尊重、支那の主權尊重及び領土の保全等を協約し、將來の平和を計つた。

山東還附の協定

支那も和蘭・葡萄牙・白耳義と共に、これ等の問題に關係ある諸國の一として、この會議に加はつたのを機會に、我が國と協定して山東の還附を受けることになり、これと共に膠州灣の開放、山東鐵道を我が國から讓り受けること、獨逸が採掘權

日英同盟廢棄



曹錕の像

軍閥の爭

北方の軍政府



段祺瑞の像

を有してゐた鑛山を、日・支兩國で經營することなどを約した（大正十一年二月）。なほこの會議で日英同盟は廢棄することに定められた。

徐世昌はこの後間もなく辭職し（同年五月）黎元洪がまた選ばれて大總統になつたが、翌年軍人の壓迫を受けて辭職し、直隷軍閥の首領曹錕が代つて大總統になつた（一九二三、大正十二年十月）。されど奉天に據つて滿洲を統轄して居た張作霖はこれを承認せず、遂に山海關を中心として兩派の戰が開かれた（一九二四、大正十三年九月）が、直隷派は失敗し、曹錕は幽閉せられた（同年十一月）。

かくの如く時局は紛亂を極めたので、これを收拾して民國の統一を計るため、段祺瑞が臨時執政の職につき、孫文を始め、廣く文武の人才を集めて善後會議を開くことにしたが、

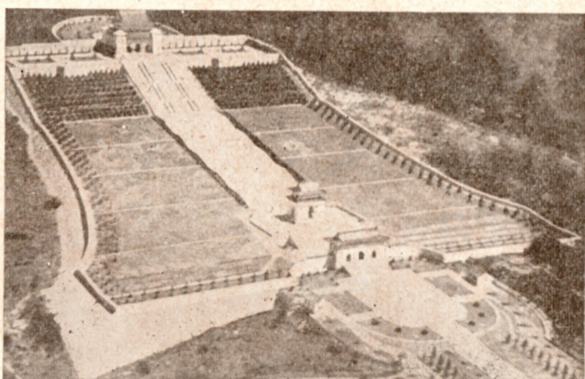


張作霖の像

南京の國民政府

大正十四年三月孫文は北京で病死し、會議の目的を達することを得なかつた。この後一年餘にして段祺瑞は辭職し、張作霖が北京に入つて中華民國軍政府を開き、その大元帥になつた（昭和二年六月）。

孫文の死後一年餘を經て、南方では蔣介石が國民革命軍總司令に就任し、孫文の唱へた三民（民族・民權・民生）主義を奉じ、軍閥を打ち倒すことを旗印として、廣東から北方征伐の途に就いた（一九二六、大正十五年七月）。その後蔣介石は容易に南方諸省を從へ、翌年（昭和二年）三月には早くも南京を占領し、ついで國民政府を南京に建て、更に北上して北京に向つた。張作霖はこれを防ぐこ



南京の中山陵（孫逸仙の墓）鳥瞰圖


蔣介石の像

とが出來ないで、遂に奉天に引揚げたが、途中で暗殺せられた（昭和三年六月）。

國民政府の一統
張作霖の死後、その子張學良が滿洲に據り、間もなく國民政府を承認したので、支那本部と滿洲とは、大體蔣介石を首席とする國民政府の下に一統せられることになつた。

外蒙古と西藏
ただ外蒙古は清の末年に獨立を企て、ついで露西亞の後援により、支那の宗主權を認めて自治權を有することになつたが、大正十年（一九二一）また露西亞共和國の援を受けて獨立を宣言し、西藏も清末以來英吉利の援によつて獨立の姿となつた。

第三十章　滿洲帝國の建設

支那の國權恢復運動
世界大戰の後、我が國は益〻勢威を揚げ、五大强國の一として世界に雄飛すると共に、英・米・佛など東洋に深い關係を有する諸國と協調して、支那の主權の尊重、領土の保全を計つて來た。然るに支那では南北對立の頃から、頻りに國權の恢復を唱へて諸外國との條約を蹂躪し、これによつて國内の人望を集めようとする傾向が生じ、屢〻列國との間に紛爭を惹き起した。その後この傾向は益〻盛んとなり、我が國に對しては、大正四年に結んだ日支條約の破棄に失敗して以來、國内到る處に排日を叫び、日貨排斥を行ひ、不法の行爲を繰返した。

滿洲事變
殊に奉天の張學良は南滿洲鐵道を始め、滿洲及び東部內蒙古に於けるあらゆる我が權益を侵害し、遂に昭和六年九月十八日奉天の北方に於て我が鐵道を破壞するに至つた。　ここに於て我が國は自衞の爲に蹶起し、一擊にしてその勢力を滿洲から逐拂つた。


我が軍の奉天北大營燒討の光景

上海事變
滿洲事變が起ると、上海ではこれに應じて一層排日の勢を高め、故

滿洲國の建設と我が國

なく我が僧侶を殺害する如き亂暴をも行つた。かかる形勢の下に、昭和七年一月我が軍隊と國民政府軍との間に衝突が起つたので、我が國は遂に出兵して敵を撃退し、居留民の安全を保障せしめて引揚げた。

張學良の勢力が滿洲・東部內蒙古から一掃せられると、かねてからその虐政に苦しめられたこの地方の人民は、これを機會に獨立し、昭和七年三月もとの宣統帝を執政に推し、仁政を行ひ平和の樂土を作ることを理想として滿洲國を建てた。我が國は世界列國に先立つてこの年九月滿洲國を承認し、東洋の平和を計る上から、協同してその領土を防衛し、治安を維持することを約した。

國際聯盟と滿洲國

滿洲事變が起ると、支那は自ら犯した不法の行爲は顧みないで、これを國際聯盟や亞米利加に訴へ、その力によつて我が國を抑へ、また滿洲國の獨立を阻まうとした。國際聯盟は世界大戰の後、世界の平和を計る爲に列國の間に作られた機關であり、亞米利加はこの聯盟


國際聯盟會議に於ける滿洲問題決議の報告の光景

我が國の國際聯盟脫退

に加はつて居ないが、前に述べた華盛頓會議の主催國である。國際聯盟は極東の事情に通じない爲に、我が國の滿洲に於ける行動を正しく解することが出來ず、遂に亞米利加と共に滿洲國を否認した。そこで我が國は昭和八年三月、決然として聯盟に對して離脫を通告し、既定の方針に從つて邁進することになつた。


國際聯盟會議に於て滿洲問題決議の後、我が代表等退場の光景

滿洲帝國

その後滿洲國は我が國の援助の下に目覺ましき發展を遂げ、遂に昭和九年三月、執政を皇帝に推載し、年號を康德と定

め、滿洲帝國を建設した。

第三十一章　東洋の現狀と國民の覺悟

國民政府治下の支那

さて、支那に於ては、その後も國民政府を承認しないものが相ついで現れ、共產黨軍も諸方に出沒して反抗を續ける有樣で、絕えず動搖を生じ、今なほ完全に統一の實を擧げ得ない。國家の體制の革まつたにつれ、社會の風潮も變り、一般に守舊の念が薄らいで、新しきを追ふ傾向となつて來た。從つて歐米風の教育が進み、文化の程度も高まつたが、これと共に外來思想の影響を受け、社會は却つて安定を失ひ、混亂の狀態を呈して居る。

露西亞共和國の東方發展

*國名は露西亞社會主義聯邦ソヴィエト共和國。

露西亞は世界戰爭中に革命を起し(大正六年一九一七)、共產主義の共和國*となつたが、戰後頻りに勢力を東方に伸ばし外蒙古と新疆省の政權をも實際上その手中に收め、強大な軍備を整へて滿洲國と接觸して居る。共產主義は現存の國家組織を破壞するもので、我が國體と根本的に相容れざる思想であるのみならず、その蔓延は世界の平和を脅すものであるから、我が國は昭和十一年十一月獨逸と協定してその防衛を計り、支那に對してもこれに協力を勸めて居るけれども、今なほ實現を見るに至らない。

日獨協定



日獨協定書調印の光景

滿洲帝國の發達

新興滿洲帝國は益〻その發展を遂げ、內治の整備、文化の發達も著しいので、列國中既にこの帝國を承認したものもあり、また承認に等しい關係を結んだものもあつて、漸く國際的地位を固めて居る。

英米の東方發展

世界戰爭の後、英・米兩國は各〻その勢力を支那に伸ばすことに勉め、我が國の國際聯盟脫退以後は益〻軍備の充實や經濟的發展に努力し、著々として實績を擧げて居る。我が國は東洋の形勢に鑒み、昭和十

倫敦軍縮會議と我が脫退

年(一九三五)から翌年にかけて日·英·米·佛·伊の諸國が倫敦に會議を開き、更めて各國海軍力を協定しようとした時に、前の華盛頓會議で定めた比率を廢し、他國を脅さず、また他國の侵略をも被らぬ安全の形勢を保つ爲に英·米と同等の勢力を有すべきことを主張したが、諸國との間に意見が一致せず、遂にこの會議から脫退した。從つて現在各國の海軍力については、これを制限する條約は存しない有樣である。



ガンヂーの像

印度

轉じて印度·南洋方面の情態を見ると、印度は英吉利の統治の下に文化も高まり、産業も發達したが、これと共に漸く國民的自覺が起り、自治や獨立が企てられ、今もガンヂー(Gandhi)等によつて熱心にその運動が行はれてゐる。

フィリッピン

西班牙の領土であつた南洋のフィリッピン群島は、明治三十一年(一八九八)以來亞米利加の領土となり、大いに開明の程度を進めたが、ここでも人民の獨立運動が盛んであつたので、昭和十年十一月亞米利加はこ

れを共和國とすることを承認した。

東洋の現狀

かかる有樣で、東洋の形勢は少からず不安の狀態に在つたところ、昭和十二年七月北平(北京)に近き蘆溝橋に於て、支那軍は我が守備軍に砲擊を加へ、翌月更に上海に於て、我が海軍陸戰隊を襲擊し、遂に現時の支那事變を惹き起した。

支那事變

我が國はかねてから支那に勸め、兩國相携へて共産主義の侵入を防ぎ、東洋の平和を確保しようとしたけれども、國民政府は我が眞意を解せず、却つて露西亞を始め歐米諸國と結んで、我が國の發展を妨げようとし、遂にかかる事態を生ぜしめたのである。

日·獨·伊防共協定

その後十一月になつて、伊太利も新に日獨防共協定に加はり、ここにこの協定の威力は一層强化せられることになつたが、しかも東洋の現情は上に述べたやうに甚だ複雜であり、將來は益〻多事といはなければならぬ。

國民の覺悟

この間に處する我が國民は、よく東洋歷史の發展に鑒み、常に時局を正視し、萬難に屈せず、確固不拔の覺悟の下に奮勵努力し、我が國運の隆昌と世界永遠の平和とを使命として進

まねばならぬ。

中等東洋史（中學校用）……（終）……

中等東洋史年表

東洋史		西紀		皇紀	國史	
		前二六九八頃	黃帝の建國	前二〇三八頃		
		二三四〇頃	帝堯即位	一六八〇頃		
		二二六〇頃	帝舜即位	一六〇〇頃		
夏	禹王	二二〇〇頃	夏興る	一五四〇頃		
殷	湯王	一七六〇頃	殷興る	一一〇〇頃		
西周	武王	一一二〇頃	周興る	四六〇頃		
東周（春	平王	七七〇	周室東遷	一一〇		
	惠王	六六七	齊の桓公霸者となる	七		
	同	六六〇		後一	神武	神武天皇御即位
	襄王	六三二	晉の文公霸者となる	二九	同	
	定王	五九八	楚の莊王霸者となる	六三	同	
	靈王	五六五頃	釋迦生る	九六頃	綏靖	

東洋史		西紀		皇紀	國史	
秋）（戰	靈王	五五二	孔子生る	一〇九	綏靖	
	敬王	四九四	吳王夫差越を破る	一六七	懿德	
	同	四八五	釋迦入滅す	一七六	同	
	同	四七九	孔子死す	一八二	同	
	元王	四七三	越王勾踐吳を滅す	一八八	孝昭	
	威烈王	四二五	威烈王即位	二三六	孝安	
	同	四〇三	韓・魏・趙諸侯となる	二五八	同	
	安王	三八六	齊の田氏侯となる	二七五	同	
	烈王	三七一	孟子生る（—二八九）	二九〇	同	
	顯王	三六一	秦孝公立つ	三〇〇	同	
	同	三三三	蘇秦合從策を唱ふ	三二八	同	
	赧王	三一一	張儀連衡策を唱ふ	三五〇	同	
	同	二七三頃	阿育王即位	三八九頃	孝靈	
	同	二五六	秦、周を滅す	四〇五	同	

（國						
		二四六	秦王政立つ	四一五	孝靈	
秦	始皇帝	二二一	秦の一統	四四〇	同	
	同	二一三	始皇帝書を焚く	四四八	孝元	
	同	二一二	始皇帝書生を坑殺す	四四九	同	
	二世皇帝	二〇六	秦亡ぶ	四五五	同	
前漢	高祖	二〇二	項羽敗死、劉王即位	四五九	同	
	惠帝	一九四	衞氏の朝鮮興る	四六七	同	
	文帝	一六〇頃	大月氏中央亞細亞に建國	五〇一頃	同	
	景帝	一五四	吳楚七國の亂	五〇七	開化	
	武帝	一四〇	始めて年號を建つ	五二一	同	
	同	一二六頃	張騫西域より還る（一三八—）	五三五頃	同	
	同	一一九	大に匈奴を破りこれを漠北に逐ふ	五四二	同	
	同	一〇八	古朝鮮の平定	五五三	同	
	宣帝	六〇	始めて西域都護を置く	六〇一	崇神	
	同	五七	新羅の建國	六〇四	同	
	同	五一	匈奴來降	六一〇	同	
	元帝	三七	高句麗の建國	六二四	同	
	同	三三		六二八	同	任那始めて入貢
	成帝	一八	百濟の建國	六四三	垂仁	
新	王莽	後八	前漢を簒ふ	六六八	垂仁	
	同	二三	王莽亡ぶ	六八三	同	
後漢	光武帝	二五	漢の復興	六八五	同	
	同	五七	倭人始めて通ず	七一七	同	筑紫の委奴國人漢に通ず
	明帝	七三	西域の經略に從ふ	七三三	景行	
	和帝	九一	班超西域都護となる、匈奴西に遁る	七五一	同	
	同	九七		七五七	同	熊襲叛す、日本武尊の御西征
	桓帝	一四八	西域僧安世高來る	八〇八	成務	
	同	一六六	大秦の使漢に來る	八二六	同	
	靈帝	一八九	袁紹悉く宦官を誅す	八四九	同	
	獻帝	二〇〇		八六〇	仲哀	神功皇后の新羅御征伐
	同	二〇八	赤壁の戰	八六八	應神	
三		二二〇	後漢亡ぶ、曹丕魏國を建つ	八八〇	同	
		二二一	劉備蜀漢國を建つ	八八一	同	
		二二六	ササン朝波斯興る	八八六	同	
		二二九	孫權吳國を建つ	八八九	同	
		二三四	諸葛亮死す	八九四	同	

國						
		二六三	蜀漢亡ぶ	九二三	應神	
		二六五	司馬炎魏を滅す	九二五	同	
西晉	武帝	二八〇	晉、吳を滅し天下を統一す	九四〇	同	
	同	二八五		九四五	同	百濟の王仁來朝す
	惠帝	二九一	八王の亂起る	九五一	同	
	愍帝	三一六	西晉亡ぶ	九七六	仁德	
東晉	元帝	三一七	東晉興る	九七七	同	
	簡文帝	三七二	佛教高句麗に傳はる	一〇三二	同	
	孝武帝	三七六	前秦江北を一統す	一〇三六	同	
	同	三八三	淝水の戰、苻堅大敗す	一〇四三	同	
	同	三八四	佛教百濟に傳はる	一〇四四	同	
	安帝	三九八	後魏興る	一〇五八	同	
	同	三九九	法顯印度に赴く	一〇五九	同	
	同	四〇一	鳩摩羅什後秦に來る	一〇六一	履中	
	同	四二〇	東晉亡ぶ、宋興る	一〇八〇	允恭	
南		四三九	後魏江北を一統す、南北朝の對立	一〇九九	同	
		四四六	後魏太武帝佛教を迫害す	一一〇六	同	
		四七九	宋亡ぶ	一一三九	雄略	
		四九四	後魏洛陽に遷都	一一五四	仁賢	
北朝		五〇二	齊亡ぶ	一一六二	武烈	
		五三四	後魏東西に分る	一一九四	安閑	
		五五〇	北齊興る	一二一〇	欽明	
		五五二		一二一二	同	百濟佛教を傳ふ
		五五五	突厥、柔然を滅す	一二一五	同	
		五五七	北周興る、梁亡ぶ	一二一七	同	
		五六二		一二二二	同	新羅、日本府を陷る
		五七〇	摩訶末生る（—六三二）	一二三〇	同	
		五七七	北齊亡ぶ	一二三七	敏達	
		五八一	隋、周を滅す	一二四一	同	
隋	文帝	五八九	隋、陳を滅し天下を一統す	一二四九	崇峻	
	煬帝	六〇七	日本、隋と好を通ず	一二六七	推古	小野妹子を隋に遣す
	高祖	六一八	隋亡ぶ、唐興る	一二七八	同	
	同	六二二	摩訶末紀元	一二八二	同	
	太宗	六二六	唐の太宗即位	一二八六	同	
	同	六二九	玄奘印度に赴く（—六四五）	一二八九	舒明	
	同	六三〇	唐、東突厥を滅す	一二九〇	同	
	同	六三五	景教唐に入る	一二九五	同	

唐	太宗	六四一	唐、吐蕃と和す	一三〇一	舒明	
	同	六四二頃	大食人波斯を併す	一三〇二頃	皇極	
	同	六四五	唐の太宗高句麗を討つ	一三〇五	孝德	大化の改新
	高宗	六五五	大食國始めて唐に通ず	一三一五	齊明	
	同	六五七	唐、西突厥を滅す	一三一七	同	
	同	六六〇	唐、百濟を滅す	一三二〇	同	
	同	六六三		一三二三	天智	百濟を援け唐軍と戰ふ
	同	六六八	高句麗亡ぶ、安東都護府を置く	一三二八	同	
	同	六七一	義淨印度に赴く	一三三一	同	
	中宗	六九〇	武后帝位に卽く	一三五〇	持統	
	同	七〇一		一三六一	文武	大寶令の制定
	玄宗	七一二	玄宗卽位	一三七二	元明	
	同	七一三	渤海國興る	一三七三	同	
	同	七二八		一三八八	聖武	渤海國始めて入貢
	同	七五五	安史の亂起る	一四一五	孝謙	
	代宗	七六三	安史の亂平ぐ、吐蕃、長安を陷る	一四二三	淳仁	
	德宗	七九四		一四五四	桓武	平安奠都
	同	八〇四		一四六四	同	最澄・空海入唐す
	憲宗	八二〇	憲宗宦官に弑せらる	一四八〇	嵯峨	
	武宗	八四五	武宗諸外教を禁絶す	一五〇五	仁明	
	昭宗	八九四		一五五四	宇多	遣唐使を止む
	哀帝	九〇七	朱全忠唐を簒ひ後梁を建つ	一五六七	醍醐	
五代		九一六	契丹の阿保機卽位	一五七六	同	
		九二六	契丹、渤海を滅す	一五八六	同	
		九三六	高麗の建國、後晉興る	一五九六	朱雀	
		九四六	契丹、後晉を滅す	一六〇六	同	
		九四七	契丹、國を遼と號す	一六〇七	村上	
北宋	太祖	九六〇	後周亡び、宋興る	一六二〇	同	
	太宗	九七九	太宗天下を一統す	一六三九	圓融	
	同	九九四	遼、高麗を從ふ	一六五四	一條	
	眞宗	一〇〇四	遼の聖宗宋を討つ（澶州の役）	一六六四	同	
	同	一〇一九		一六七九	後一條	刀伊の賊入寇
	仁宗	一〇三八	西夏建國	一六九八	後朱雀	
	同	一〇四四	宋、西夏と和す	一七〇四	同	
	神宗	一〇六九	王安石新法を行ふ	一七二九	後三條	
	徽宗	一一一五	女眞、國を金と號す	一七七五	鳥羽	
	同	一一二〇	宋・金の同盟	一七八〇	同	

宋	徽宗	一一二五	遼亡ぶ	一七八五	崇德	
	欽宗	一一二七	金、北宗を滅す、高宗卽位	一七八七	同	
南宋	高宗	一一三二頃	西遼の建國	一七九二頃	同	
	同	一一三八	南宗臨安に都す	一七九八	同	
	同	一一四一	秦檜金と和を結ぶ	一八〇一	同	
	同	一一五三	金燕京に遷都す	一八一三	近衞	
	同	一一六一	金の世宗卽位	一八二一	二條	
	孝宗	一一六三	宋の孝宗卽位	一八二三	同	
	寧宗	一二〇六	成吉思汗蒙古を一統す	一八六六	土御門	
	同	一二一一	西遼亡ぶ	一八七一	順德	
	同	一二一九	成吉思汗の西征	一八七九	同	
	同	一二二三	蒙古軍阿羅思に侵入す	一八八三	後堀河	道元入宋
	理宗	一二二七	西夏亡ぶ、成吉思汗死す	一八八七	同	
	同	一二三四	金亡ぶ	一八九四	四條	
	同	一二三六	拔都の西征（—一二四二）	一八九六	同	
	同	一二五四	旭烈兀の西征	一九一四	後深草	
	同	一二五八	旭烈兀サラセン帝國を滅す	一九一八	同	
	同	一二六〇	忽必烈（世祖）卽位	一九二〇	龜山	
	度宗	一二六八	海都叛す	一九二八	同	
	同	一二七一	忽必烈國號を建てて元といふ	一九三一	同	
	度宗	一二七四	元、日本を侵す	一九三四	龜山	文永の役
	恭帝	一二七五	マルコ＝ポーロ元に來る	一九三五	後宇多	
元	世祖	一二七六	南宋亡ぶ	一九三六	同	
	同	一二八一	元、日本を伐ち大敗す	一九四一	同	弘安の役
	同	一二九四	世祖死す	一九五四	伏見	
	成宗	一三〇三	海都の亂平ぐ	一九六三	後二條	
	順帝	一三三三	順帝卽位	一九九三	後醍醐	北條氏亡ぶ
明	太祖	一三六八	元亡び、明興る	二〇二八	後村上	
	同	一三六九	帖木兒中央亞細亞を平定	二〇二九	長慶	
	同	一三九二	李成桂朝鮮國を建つ	二〇五二	後龜山	
	同	一三九三	帖木兒伊兒汗國を併す	二〇五三	後小松	
	同	一三九五	帖木兒欽察汗國を定む	二〇五五	同	
	惠帝	一三九九	帖木兒印度を侵す、燕王朱棣兵を起す	二〇五九	同	
	同	一四〇一		二〇六一	同	足利義滿明と通交
	成祖	一四〇二	明の成祖卽位	二〇六二	同	
	同	一四〇五	帖木兒死す、鄭和始めて南海に航す	二〇六五	同	
	同	一四〇九	成祖韃靼を親征す	二〇六九	同	
	同	一四一四	成祖瓦剌を親征す	二〇七四	稱光	
	同	一四二一	成祖都を北平に遷す	二〇八一	同	

明

英宗	一四四九	土木の變、英宗擒となる	二一〇九	後花園	
孝宗	一四九八	ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度航路を發見す	二一五八	後土御門	
武宗	一五一〇	葡萄牙人ゴアを占領す	二一七〇	後柏原	
世宗	一五二七	莫臥兒帝國興る	二一八六	同	
同	一五三七	葡萄牙人阿媽港を占領す	二一九七	後奈良	
同	一五四二	韃靼の俺答明に寇す	二二〇二	同	
同	一五四三		二二〇三	同	葡萄牙人日本に來る
同	一五五六	アクバル帝立つ	二二一六	同	
神宗	一五六五	西班牙人フィリッピン諸島を占領す	二二二五	正親町	
同	一五九二	明、朝鮮を援く	二二五二	後陽成	文祿の役
同	一六〇〇	英人東印度會社を起す	二二六〇	同	關ヶ原役
同	一六〇四	佛人東印度會社を起す	二二六四	同	
同	一六一六	弩爾哈赤後金國を建つ	二二七六	後水尾	德川家康薨ず
同	一六一九	蘭人爪哇に據る	二二七九	同	
熹宗	一六二四	蘭人臺灣を占領す	二二八四	同	
毅宗	一六三六	後金の太宗國號を清と改む	二二九六	明正	
同	一六四四	李自成明を滅す、清、北京に都す	二三〇四	後光明	
世祖	一六四五	清辮髪令を下す	二三〇五	同	
同	一六五八	莫臥兒帝アウラングゼブ即位	二三一八	後西	

清

世祖	一六五九		二三一九	後西	朱舜水來朝
聖祖	一六六一	康熙帝即位(—一七二二)、鄭成功臺灣に據る	二三二一	靈元	
同	一六七三	三藩の亂起る	二三三三	同	
同	一六七四	佛人ポンヂシェリーに據る	二三三四	同	
同	一六八一	三藩の亂平ぐ	二三四一	同	
同	一六八三	臺灣、清の領となる	二三四三	同	
同	一六八九	尼布楚條約	二三四九	東山	
同	一六九七	外蒙古、清の領土となる	二三五七	同	
世宗	一七二三	基督敎の禁止	二三八三	中御門	
高宗	一七三五	乾隆帝即位(—一七九六)	二三九五	同	
同	一七五七	清、天山北路を征服す、印度にて英軍が佛軍を破る	二四一七	桃園	
同	一七六〇	清、天山南路を平定す	二四二〇	同	
同	一七八六	暹羅、清に朝貢す	二四四六	光格	
同	一七八九	安南、清に朝貢す	二四四九	同	
同	一七九〇	緬甸、清に朝貢す	二四五〇	同	
同	一七九二		二四五二	同	露使ラックスマン蝦夷に來る
仁宗	一八〇二	阮福映、安南を一統す	二四六二	同	
宣宗	一八三九	阿片戰爭起る	二四九九	仁孝	

清

宣宗	一八四二	南京條約	二五〇二	仁孝	
同	一八五〇	長髪賊の亂起る	二五一〇	孝明	
文宗	一八五三		二五一三	同	ペリー來朝
同	一八五六	英・佛兩國、清に宣戰す	二五一六	同	
同	一八五七	印度土民の亂	二五一七	同	
同	一八五八	莫臥兒帝國亡ぶ、露西亜黒龍江以北の地を占む	二五一八	同	幕府米・佛・蘭・露・英と假條約を結ぶ
同	一八五九	佛國西貢を占領す	二五一九	同	
同	一八六〇	英佛聯合軍北京を占領す、北京條約、露西亜、ウスリー河以東の地を占む	二五二〇	同	櫻田門の變
穆宗	一八六二	安南、佛國と和す	二五二二	同	
同	一八六三	朝鮮王李熙立つ	二五二三	同	英艦鹿兒島を砲撃
同	一八六四	長髪賊の亂平ぐ	二五二四	同	英・佛・米・蘭の軍艦長門を砲撃
同	一八六七	佛國、柬蒲塞を保護國とす	二五二七	明治	明治天皇踐祚、王政復古
同	一八七一	露國、伊犂を占領す	二五三一	同四	
德宗	一八七四	德宗即位	二五三四	同七	臺灣征伐
同	一八七七	英國女王印度女皇と稱す	二五三七	同一〇	西南の役

清

德宗	一八八三	安南、佛國の保護國となる	二五四三	明治一六	
同	一八八四	清佛戰爭起る	二五四四	同一七	朝鮮事變(甲申の亂)
同	一八八五	天津條約成る	二五四五	同一八	
同	一八八六	緬甸、英領となる	二五四六	同一九	
同	一八八七	佛領印度支那成立	二五四七	同二〇	
同	一八八九		二五四九	同二二	憲法發布
同	一八九四	日清戰爭起る	二五五四	同二七	
同	一八九五	下ノ關條約成る	二五五五	同二八	三國干渉
同	一八九八	獨・露・英、清の港灣を租借す、米國フィリッピン諸島を讓り受く、戊戌の政變	二五五八	同三一	
同	一八九九	佛蘭西、廣州灣を租借す、義和團の暴動起る	二五五九	同三二	
同	一九〇〇	露國、滿洲を占領す	二五六〇	同三三	
同	一九〇一	北清事變落着す	二五六一	同三四	
同	一九〇二	日英同盟	二五六二	同三五	
同	一九〇四	日露戰爭起る	二五六四	同三七	
同	一九〇五	ポーツマス條約、日英同盟の擴張	二五六五	同三八	日韓協約
同	一九〇六	清朝憲政準備の詔を下す	二五六六	同三九	
同	一九〇七		二五六七	同四〇	日佛・日露協約成る

宣統帝	一九〇八	西太后及び德宗死す	二五六八	明治四一	日・米覺書を交換す
同	一九一〇		二五七〇	同 四三	韓國併合
同	一九一一	革命黨の蜂起	二五七一	同 四四	
同	一九一二	淸亡ぶ、中華民國興る	二五七二	同 四五	明治天皇崩御
中華民國	一九一三	袁世凱大總統就任、列國支那共和國を承認す	二五七三	大正二	
	一九一四		二五七四	同 三	日獨開戰
	一九一六	袁世凱死す、黎元洪大總統となる(—一九一七)	二五七六	同 五	
	一九一七	廣東に軍政府開設、民國獨・墺に宣戰す	二五七七	同 六	
	一九一八	徐世昌大總統となる(—一九二二)	二五七八	同 七	
	一九二一	華盛頓會議、外蒙古獨立	二五八一	同 一〇	
	一九二二	山東問題解決、黎元洪大總統となる(—一九二三)	二五八二	同 一一	
	一九二三	曹錕大總統となる(—一九二四)	二五八三	同 一二	日英同盟を廢棄す
	一九二四	段祺瑞臨時執政となる	二五八四	同 一三	
	一九二五	孫文死す	二五八五	同 一四	
	一九二六	蔣介石の北伐	二五八六	同 一五	大正天皇崩御
	一九二七	北京に軍政府を開く、國民政府を南京に開く	二五八七	昭和二	
	一九二八	濟南事件、張作霖暗殺	二五八八	昭和三	
	一九三一	滿洲事變	二五九一	同 六	
	一九三二	上海事變、滿洲國獨立	二五九二	同 七	滿洲國承認
	一九三三		二五九三	同 八	國際聯盟脫退通告
	一九三四	滿洲帝國の建設	二五九四	同 九	
	一九三五		二五九五	同 一〇	ロンドン軍縮會議と我が國の脫退
	一九三六	西安事變	二五九六	同 一一	日獨防共協定
	一九三七	支那事變	二五九七	同 一二	

昭和十二年六月二十五日印刷
昭和十二年六月二十八日發行
昭和十三年一月十日訂正再版印刷
昭和十三年一月十五日訂正再版發行



中等東洋史 中學校用

定價金九拾錢

著者 羽田亨

發行者兼印刷者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房

代表者 同所 合資會社冨山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市深川區白河町四丁目一番地 東京印刷株式會社

發行所 (明治二十九年六月設立) 東京神田 合資會社 冨山房

振替口座東京五〇一番
電話神田 2.171 2.172 2.173 2.174 2.175 2.176 2.177 2.178

文學博士 羽田亨 著

中等東洋史

中學校用

東京神田 富山房

